

# 伊勢国分寺跡 2

第25次発掘調査概要報告

2002年3月

鈴鹿市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、国・県費補助事業として鈴鹿市教育委員会が2001（平成13）年度に実施した史跡伊勢国分寺跡記念物保存修理事業にかかる伊勢国分寺跡（第25次）発掘調査の概要をまとめたものである。

2. 発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体	鈴鹿市教育委員会（教育長 山下 健）	
調査指導	大場範久（鈴鹿市文化財調査会会長） 川越俊一（奈良文化財研究所） 高瀬要一（奈良文化財研究所） 八賀 晋（三重大学名誉教授） 渡辺 寛（皇學館大學教授） 文化庁文化財保護部記念物課 三重県教育委員会スポーツ生涯学習課文化財保護室 三重県埋蔵文化財センター	
調査担当 （組織及び構成）	鈴鹿市考古博物館	
	参事兼鈴鹿市考古博物館館長	林 銀哉
	副参事兼埋蔵文化財係長	中森成行
	埋蔵文化財係指導主事	北条正則
	副主幹	藤原秀樹
	副主査	鈴木孝幸
	事務吏員	河村みゆき
	囑託	林 和範, 吉田真由美

3. 調査を実施した箇所及び面積は以下の通りである。

三重県鈴鹿市国分町字堂跡283・284・285・286・290・291・292、字西高木229・230

調査面積 1,100㎡

4. 調査期間は25次が2001年5月14日から11月22日、25-2次が2002年2月7日～3月12日である。

5. 現地調査は主に藤原・林(和)が担当し、吉田が補助した。

6. 本書の執筆は藤原・林が分担して行い文責は文末に記した。編集は藤原が担当した。

7. 調査参加者は以下のとおりである。

〔現地調査〕 瀬戸勝子・長田はへ子・永戸 清・永戸つや子・永戸尚子・永戸久子・永戸ヒナ子・永戸三代・八鳥喜代子

〔遺物整理・事務〕 片岡貴美子・川北 雅・神田 梢・杉本恭子・別府智子・水谷由起子

8. 遺跡位置図には国土地理院発行1/25,000地形図「鈴鹿」の一部を使用した。

9. 座標には国土座標第IV系を用いた。図中の方位は座標北を示す。

10. 遺構番号は遺構の種別を示すSA(柵・塀)・SB(建物)・SC(通路・廊下)・SD(溝)・SK(土坑)・SI(竪穴住居)の記号の後に発掘年次を示す「01」と2桁の遺構の通し番号を付けSB0101のように示した。

11. 調査区は、原則として調査区北西角の国土座標の下3桁を組み合わせて269・804のように示すことにしている。しかし、今回中門・南門付近については便宜的にX=51747.0 Y=-121300.0を原点とした6m方眼を設定し東へ1・2・3…、南へA・B・C…の番号を付けて記録・遺物の取り上げを行った。

12. 本調査に係る遺物・写真・図面は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。

13. 調査及び報告書刊行にあたっては、上記指導委員会の先生方の他に地元各位をはじめ下記の方々の御協力を得た。

坂井秀弥・吉水康夫・杉谷正樹・大川勝宏・山澤義貴・早川万年・倉田直純

# 目次

## 本文目次

I. はじめに	1	5. 塔推定地の調査	12
II. 遺構と遺物	3	6. 南門の調査	12
1. 基本層序	3	7. 出土遺物	15
2. 中門周辺の調査	3	III. まとめ	16
3. 東回廊南東隅の調査	6	English Table of Contents and Summary	29
4. 東回廊北東隅の調査	10	報告書抄録	41

## 図版目次

Fig. 1 伊勢国分寺跡の位置	1	Fig. 17 東回廊北東隅内溝セクション	11
Fig. 2 発掘調査区位置図	2	Fig. 18 東回廊北東隅外溝セクション	11
Fig. 3 中門付近遺構配置図	4	Fig. 19 塔推定地トレンチ遺構配置図	11
Fig. 4 中門Fラインセクション	5	Fig. 20 南門付近遺構配置図	13
Fig. 5 西回廊Dラインセクション	5	Fig. 21 遺構復元図	14
Fig. 6 中門Gラインセクション	6	Fig. 22 伊勢国分寺築造計画(案)	18
Fig. 7 東回廊南東隅付近遺構配置図	7	Fig. 23 軒丸瓦(1)	19
Fig. 8 P・Q-1区遺構配置図	7	Fig. 24 軒丸瓦(2)	20
Fig. 9 東回廊外溝Jラインセクション	8	Fig. 25 軒丸瓦(3)	21
Fig. 10 東回廊Lラインセクション	8	Fig. 26 軒平瓦(1)・押印瓦	22
Fig. 11 東回廊内溝Oラインセクション	8	Fig. 27 軒平瓦(2)・塼(1)	23
Fig. 12 東回廊外溝Oラインセクション	8	Fig. 28 軒平瓦(3)・塼(2)	24
Fig. 13 東回廊内溝拡張区セクション	9	Fig. 29 軒平瓦(4)	25
Fig. 14 竪穴住居SI0127実測図	9	Fig. 30 軒平瓦(5)	26
Fig. 15 竪穴状遺構SI0125実測図	9	Fig. 31 平瓦(1)・須恵器・灰釉陶器・土師器	27
Fig. 16 東回廊北東隅付近遺構配置図	10	Fig. 32 平瓦(2)・鉄刀子・磨製石斧	28

## 写真目次

Plate 1	30	Plate 7	36
調査区全景		東回廊北東隅/東回廊北東隅外溝/東回廊北東隅内溝	
Plate 2	31	Plate 8	37
中門(西半)/西回廊		南門/南門外周溝	
Plate 3	32	Plate 9	38
西回廊内溝/西回廊外溝/中門前面瓦溜土坑/現地説明会		出土遺物(軒丸瓦)	
Plate 4	33	Plate 10	39
中門(東半)/東回廊/重圏文軒丸瓦の出土		出土遺物(軒平瓦)	
Plate 5	34	Plate 11	40
東回廊南東隅/東回廊南東隅外溝/東回廊南東隅内溝		出土遺物(その他の遺物)	
Plate 6	35		
竪穴状土坑SI0125/竪穴住居SI0127/塔推定地トレンチ			

## I. はじめに

伊勢国分寺跡は鈴鹿川左岸の台地上、鈴鹿市国分町字堂跡・西高木・西谷に所在する。大正11(1922)年には国史跡として指定されている。

鈴鹿市教育委員会では昭和63(1988)年度から国・県費補助事業として史跡整備を前提とした寺域の確認調査に着手し、築地塀に囲まれたほぼ180m四方の伽藍地の範囲を確定した。鈴鹿市ではその成果をもとに、平成7(1995)年から3ヵ年かけて史跡の公有地化を完了した。また、隣接地にガイダンス施設を兼ねた鈴鹿市考古博物館を建設し、平成10(1998)年秋に開館した。

平成11(1999)年度からは、新たに整備計画策定に先立つ中心伽藍の位置・規模確認のために、史跡指定地内の調査を市単費事業として着手した。

平成11年度の第22・23次調査は史跡碑の周囲を対象として実施した。講堂基壇を検出し、東西規模が約33mであることを確認した。

平成12(2000)年度の第24次調査では講堂基壇の南北規模が約21mであることを確認し、基壇化粧の基底と考えられる埴・瓦の列と軒から転落した状態をとどめた軒瓦を検出した。基壇の平面形態から講堂は7間×4間の柱間を持つ建物が想定される。また、金堂の調査も並行して実施した。金堂の基壇は講堂基壇の南約22mで検出され、東西規模は約31m、南北規模は約22mであることが確認された。(註1)

註1 22～24次調査の概要は『伊勢国分寺跡1』として現在作成中である。遺跡周囲の歴史環境及び調査履歴の詳細はそちらに詳しいので参照されたい。

今回、平成13(2001)年度の25次調査は伽藍地内調査の3年次である。新たに国・県庫補助事業(史跡伊勢国分寺跡 記念物保存修理)としての実施となった。調査方針として中門、回廊の規模確認と、併せて塔の所在確認を行うこととした。

現地調査は5月14日に基準点の移設作業から着手した。基本的に表土除去から人力で作業を行い中門・東回廊の調査を進めた。遺構は平面確認に止め、基壇及び溝等について適宜サブトレンチを設定して断面観察を行った。塔推定地のトレンチ調査については対象地が水田であり床が堅く締まっていたため、やむを得ず小型重機を導入して表土除去を行った。ほぼ中門・東回廊の規模が確定した後、10月6日に現地説明会を開催して58名の市民の参加を得た。その後も、詳細部分の補足調査や記録作業を行い、11月31日まで中門・東回廊調査区を重機で埋め戻し一旦調査を終了した。

その後、史跡整備計画策定のための詳細地形図作成が必要となり、補助事業計画を変更して航空写真測量を実施する事となった。それに併せ南門の調査を25-2次として実施した。ただし、予算執行の関係から着手が2月7日と遅れたため、遺構検出のみを3月12日まで実施し、詳細調査は次年度に継続することとした。

(藤原)

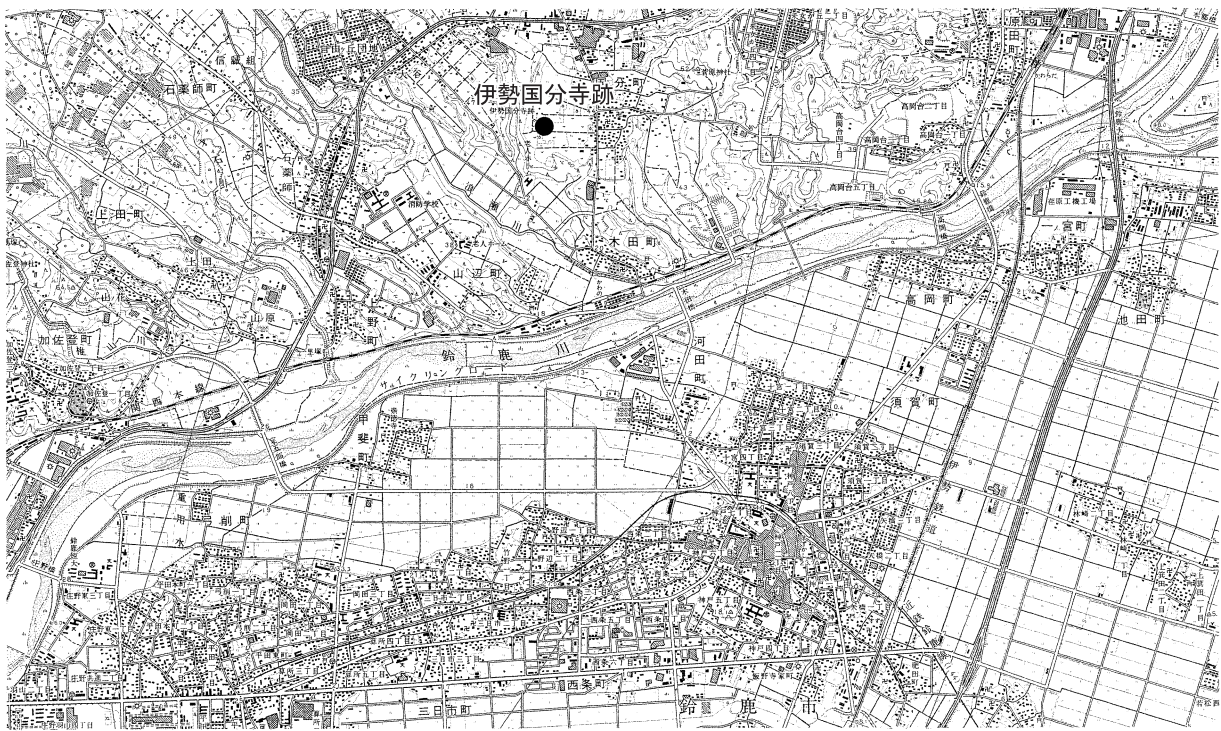


Fig. 1 伊勢国分寺跡の位置(1 : 50,000)



Fig. 2 発掘調査区位置図(1 : 1,600)

## II. 遺構と遺物

### 1. 基本層序

基本層序及び層厚は以下の通りである。

I層：表土。暗褐色土層からなる耕作土。瓦小片を含む。0.1～0.4m。II層：褐色粘質土からなる旧耕作土である。場所によって瓦小片を含む。下面が遺構検出面である。0.1～0.2m。III層：明褐～黄褐粘質シルト層。以下が地山層。現表土から検出面までが浅い場合にはII層は存在しない。

### 2. 中門周辺の調査

金堂の約50m南において調査区を設定した。国土座標を基準として6m方眼を設定し、基本的にグリッド法を用いた。必要に応じてグリッドを連結・拡張して面的調査を行い、断ち割り調査が必要な遺構に関してはサブトレンチを設定し土層の観察を行った。遺構検出面はI・II層を0.3～0.4m除去したIII層上面である。

**中門SB0101** (Fig. 3・4・6) 削平が著しく、地上部分および地下のかなりの部分は失われている。かろうじて残存していた0.1～0.35m程の基礎地形最下部のみ確認できた。掘り込みの断面観察からは明確な層状の版築構造はみられないが、しまりの良い暗褐～褐色粘質シルトを用いている。埋土中には瓦が含まれず、底面は平坦でなく凹凸がある。礎石・礎石据え付け痕などは確認されなかったが、基礎地形の確認、周囲の多量の瓦、柱穴が残っていないなどの状況から瓦葺礎石建物といえる。足場穴のような建築、解体に使われたと考えられる小柱穴は確認されていない。中門基礎地形南辺西側ではSD0131上層の瓦が耕作によってカクランを受け上面を覆っていたためその一部を除去し、明確な基礎地形ラインの確認を試みた。中門基壇規模は、基礎地形東西端の遺存状況が悪いため、東西回廊の取り付け部分とそれに伴う溝の状況から推定すると約19.5×11.85mである。

基礎地形の下層にはFラインでは7箇所、Gラインでは2箇所の溝状の落ち込みが確認された。いずれも出土遺物はなく、平面での確認を行っていないため形状は不明である。基礎地形南辺では下層の落ち込みを整地した後、掘り込みを行ったと考えられる。

**中門南面溝SD0131** (Fig. 3) 瓦を多く含む、深さ0.2～0.3mの浅い溝状の遺構である。中門南辺東側では検出できたが、西側では削平のためか確認されなかった。幅約2mを検出し、南側は調査区外まで広がる。

上層は耕作によりカクランを受け、瓦片が基礎地形上面まで引っ張られている。下層は瓦の含量も少なく、破片が小さい。

**瓦溜土坑SK0132** (Fig. 3・4) 中門正面に位置する0.4～0.6mの土坑状の遺構である。上層に多量の瓦を含み、南端は調査区外まで広がる。下層は少量の瓦を含み、南北幅は約3.5mである。改築の際の廃材処理のための土坑か。

**西回廊SC0102** (Fig. 3・5) 中門基壇取り付け部から西へ約11mを検出した。柱穴、礎石据え付け痕等は全く留めていない。基礎地形も残存しておらず、地山が露出し回廊そのものの痕跡は認められない。中門基礎地形西辺から7.2～7.5mの間隔で平行して西へ延びる溝を回廊外溝、内溝と判断し、その間を回廊と推定した。回廊は、中門のほぼ中央に取り付く。

**西回廊外溝SD0103・SD0104** (Fig. 3・5) 東西方向の溝である。後述の内溝と一定の間隔を保って並んでおり、その間が回廊と推定される。上層には深さ約0.2mの瓦を多量に含み、なだらかに調査区外へ広がる溝SD0103、下層には少量の瓦を含むSD0104が確認できた。SD0104は深さ約0.6m、断面の形状は北に当たる回廊側は急激に落ち込み、南側は緩やかに立ち上がる。

**西回廊内溝SD0106・SD0105** (Fig. 3・5) 外溝と同様に、上層SD0106、下層SD0105に分けることができる。SD0106は瓦を含む深さ0.2m程の浅い溝である。SD0105は深さ約0.5m溝で、南端の回廊側はやや急に落ち込み、北側は緩やかに立ち上がっている。土層には不整合な面も見られ、ある程度埋没した後の再掘削も想定できる。

**東回廊SC0114** (Fig. 3) 東回廊についても西回廊と同様に全て削平されており、瓦を含む回廊外溝SD0115によって位置を推定した。北側は未調査で南側の幅3m分を検出した。

**東回廊外溝SD0115** (Fig. 3) 耕作による攪乱を受け上層の瓦片が回廊上面までを覆っていたため、一部を除去してラインの検出を行った。東回廊南辺の外側を囲う溝である。幅2.6mを検出し南端については調査を行っていない。西回廊外溝・東回廊南東隅の調査の状況から、瓦を多量に含む上層の下に、少量の瓦を含む下層が存在するものと考えられる。

**柱穴列SA (SB) 0113, 溝SD0111, SD0112** (Fig. 3)

1辺約0.4mの方形の柱穴を4基検出した。柱穴列とし

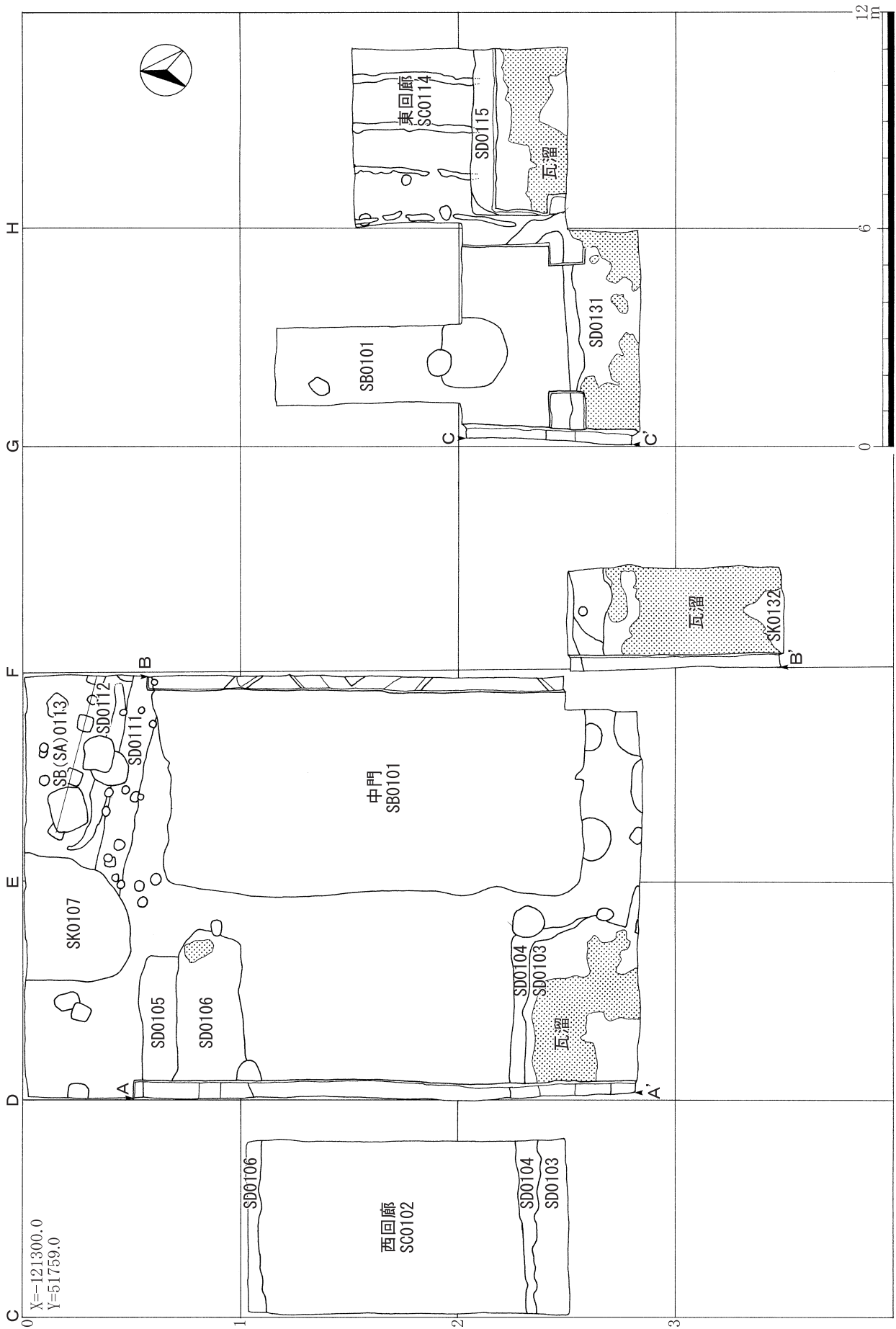


Fig. 3 中門付近遺構配置図(1 : 150)

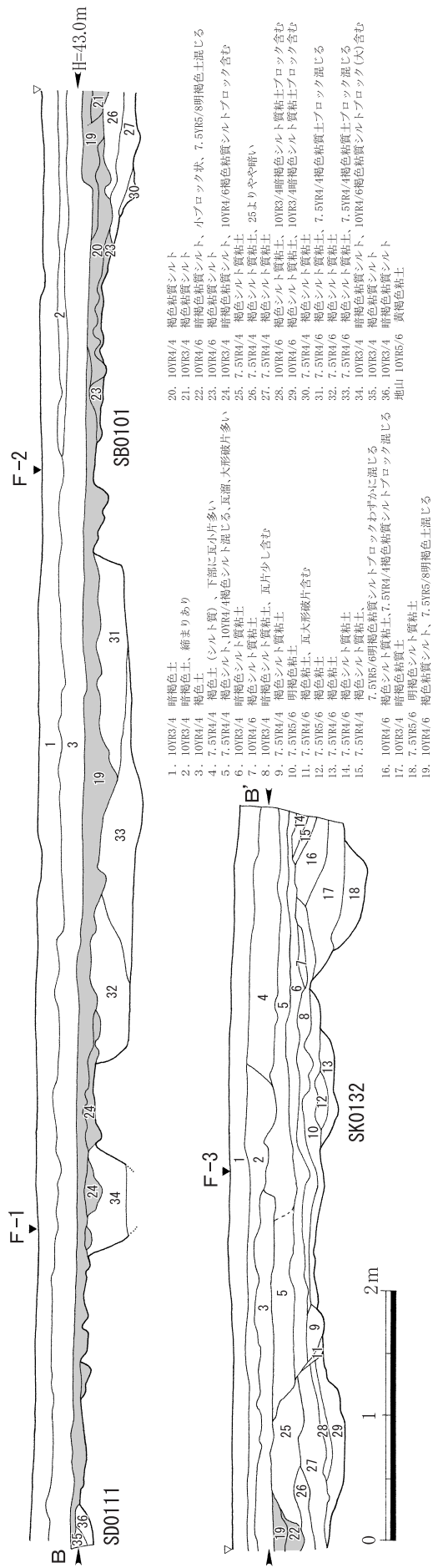


Fig. 4 中門Fラインセクション(1:50)

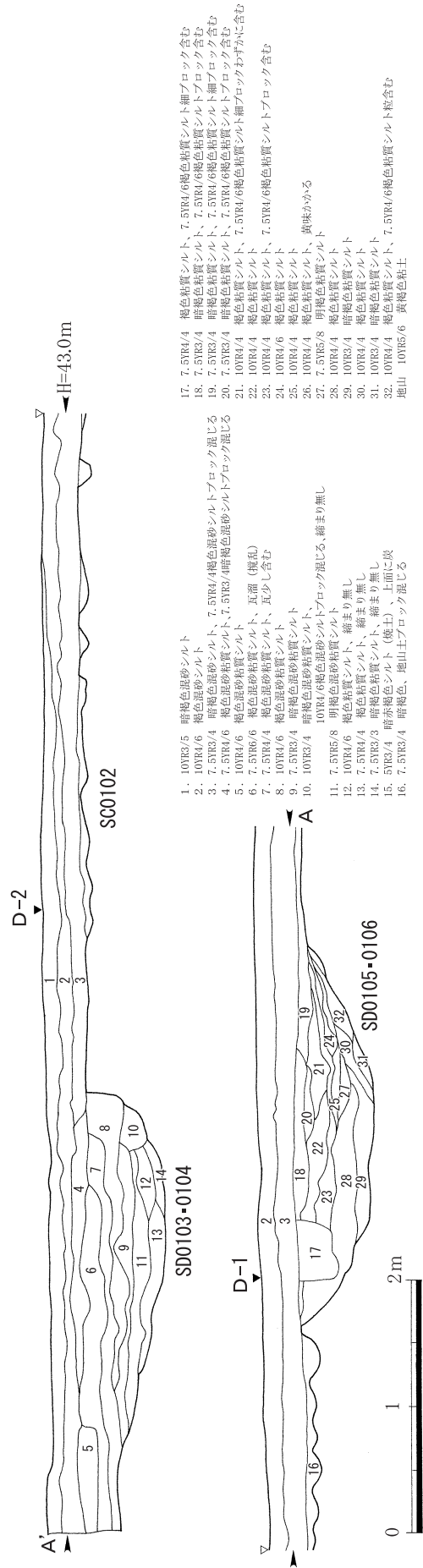
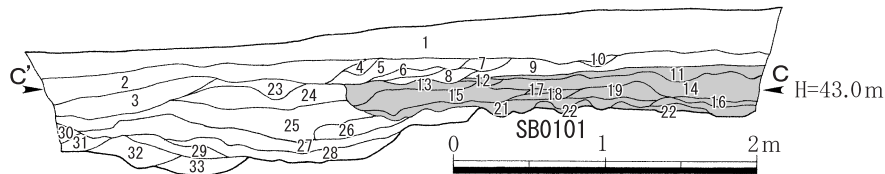


Fig. 5 西回廊Dラインセクション(1:50)





- |  |   |
|--|---|
| 1. 10YR3/4 暗褐色シルト、やや砂質                                   | 18. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト、10YR5/6 黄褐色粘質シルト多く含む  |
| 2. 7.5YR4/4 褐色粘質土、瓦溜、大形破片多い                              | 19. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト多く含む |
| 3. 7.5YR4/4 褐色粘質土、瓦溜、小片                                  | 20. 10YR4/6 褐色粘土                              |
| 4. 7.5YR4/6 褐色粘質シルト、7.5YR3/4 暗褐色土ブロック含む                  | 21. 10YR4/4 褐色粘質シルト                           |
| 5. 7.5YR3/4 暗褐色土   | 22. 10YR4/6 褐色粘質シルト                           |
| 6. 7.5YR4/6 褐色粘質シルト、7.5YR3/4 暗褐色土ブロック含む                  | 23. 10YR5/6 黄褐色シルト                            |
| 7. 7.5YR3/4 暗褐色土、7.5YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む、瓦少し混ざる          | 24. 10YR4/4 褐色粘質シルト、10YR4/6 褐色粘質シルト細ブロック含む    |
| 8. 7.5YR3/4 暗褐色土   | 25. 10YR4/4 褐色粘質シルト                           |
| 9. 7.5YR3/4 暗褐色土、7.5YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック含む、瓦少し混ざる          | 26. 10YR3/4 暗褐色粘土、10YR4/6 褐色粘質シルト細ブロック含む      |
| 10. 7.5YR3/4 暗褐色土、10YR3/4 暗褐色シルト混じる                      | 27. 10YR3/4 暗褐色粘土                             |
| 11. 10YR5/6 黄褐色粘質シルト、7.5YR4/4 褐色粘質シルト混じる。締まっている、瓦わずかに混ざる | 28. 10YR4/4 褐色粘土                              |
| 12. 10YR3/3 暗褐色シルト                                       | 29. 10YR4/6 褐色粘土                              |
| 13. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト、10YR5/6 黄褐色粘質シルト細ブロック含む          | 30. 10YR4/6 褐色粘土                              |
| 14. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト、7.5YR4/6・10YR4/6 褐色粘質シルト細ブロック含む  | 31. 10YR4/4 褐色粘土                              |
| 15. 10YR4/6 褐色粘質シルト                                      | 32. 10YR4/4 褐色粘質シルト、10YR4/6 褐色粘土混じる           |
| 16. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト                                  | 33. 10YR4/6 褐色粘土                              |
| 17. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト、10YR4/3 にぶい黄褐色シルトを含む             | 地山 7.5YR5/8 明褐色粘土                             |

Fig. 6 中門Gラインセクション(1:50)

だが調査区外に展開する掘立柱建物の可能性も考えられる。柱間約1.5mで東西方向に並ぶ。国分寺の伽藍遺構とは建物方向を異にし、ややN15°Eと東偏する。南側に位置する溝、幅0.8mのSD0111・幅0.3~0.5mのSD0112がSA(SB)0113に平行しているため関連するものと考えられるが、未掘削のため詳細は不明である。これらの遺構の時期は中門基礎地形が溝SD0111を切つ

て掘り込まれており、中門建立に先立つ遺構と考えられる。

**土坑SK0107** (Fig. 3) 中門SB0101の北西付近に位置する土坑。北側は調査区外に延びているが南北2.9m、東西3.6mの範囲で検出した。未掘のため、深さなど詳細は不明だが、上層に瓦を多く含むことが観察される。瓦の廃棄土坑か。(林)

### 3. 東回廊南東隅の調査

東回廊の南東隅を確認するため中門調査区から12m間隔に南北2m×東西5mのトレンチを設定した。L~Mラインで南北方向の溝を検出したため、拡張して面的調査を行った。

**東回廊SC0114** (Fig. 7) 中門取り付け部と同様に柱穴、礎石据え付け痕等は全く留めていない。基礎地形も残存しておらず、地山が露出し回廊そのものの痕跡は認められない。外溝SD0115とSD0117の会おう点を南東の出隅、内溝とみられるSD0116の南東端を入隅、それら溝間を回廊と推定した。SD0116が本来の掘り方を正確に留めているかやや疑問があるが、現況では南辺幅7.1~7.3m、東辺幅6.0mが求められる。中門基壇取り付け部から南東の出隅までの距離はおよそ24.4mを測る。

**東回廊外溝SD0115** (Fig. 7・9・10) 中門取り付け部から東に延びる、Lラインを1.2m越えて末端となり、延長は24.8mを測る。J区では幅2.4m、深さ0.75mの断面逆台形状を呈する。上層約0.3mは瓦溜状で、軒瓦をはじめ残りの良い個体が比較的多い。中層は約0.3mで下面にわずかに瓦を含む。L区では瓦溜は失われ、下層も深さ0.2mと極端に浅くなっている。

**東回廊外溝SD0117** (Fig. 7・12) SD0115の東端部から始まって、北に向かって延びる溝である。安定した部分では幅2.5mあまりで、南端に向かって狭くなっている。上面は瓦溜状で、下層はSD0115などとは異なり0.1~0.2m程の浅い皿状の掘り方をもつ。瓦溜まりはかなり削平を受け残りは良くない。

**溝SD0118** (Fig. 7) SD0117の外(東側)に平行する瓦溜まり状の溝である。幅は3mほど広がる。埋土に締まりがなく、含まれる瓦は小破片でローリングを受けたものも多い。後世にSD0117の瓦を処理するために掘られたものか。

**東回廊内溝SD0116** (Fig. 7・11) 検出時は竪穴住居の南東隅かとも見られたが、位置的な関係から東回廊の内溝のコーナー部と判断した。コーナー部はかろうじて残存していたが西側は後世の土坑SK0133に切られている。調査区北壁ラインでは幅1.4m、深さ0.5mの逆台形である。しかし、埋土が他の回廊外溝と異なり暗褐色系の還元色を呈さず、しまりがなく、瓦を全く含まないことから、後世に内溝をなぞるかたちで再掘削されたものである可能性がある。

**土坑SK0133** (Fig. 7・13) SD0116の西側を大きく切る方形の土坑である。東西3m×南北4m以上の規模を

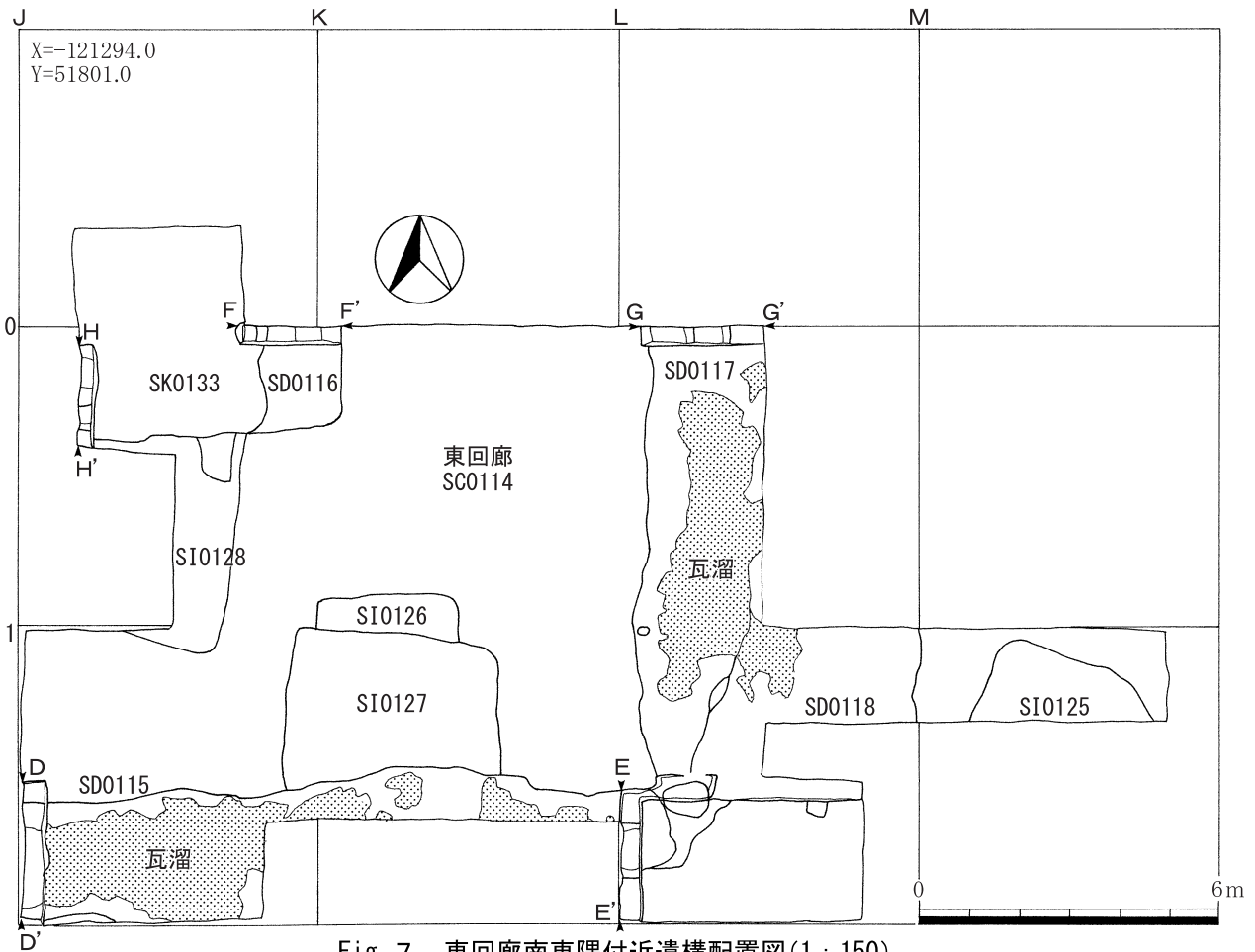


Fig. 7 東回廊南東隅付近遺構配置図(1 : 150)

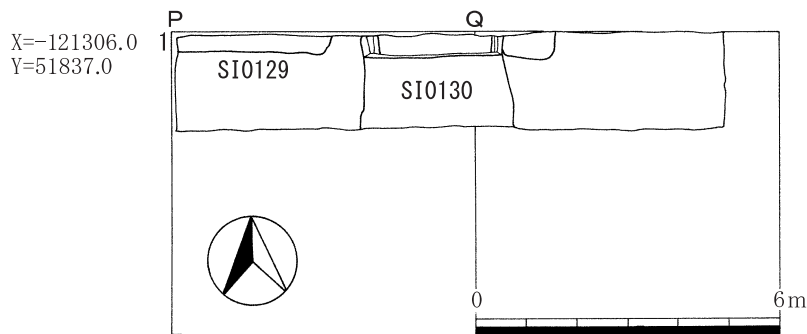


Fig. 8 P・Q-1区遺構配置図(1 : 150)

持つ、埋土は地山土と有機質土の互層で全くしまりが  
ない。上層は山砂と地山土で転圧されている。後世の  
天地返しの痕跡と見られる。

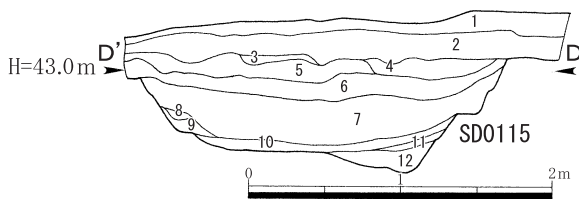
**竪穴住居SI0126・SI0127 (Fig. 7・14)** 東回廊  
SC0114の基底の地山面で検出した、重複する竪穴住居  
である。SI0126は北辺2.7mと小形で、ほぼ正方位を  
とる。南側の大部分をSI0127に切られるが、掘り方は  
SI0127床面よりわずかに深く残存している。

SI0127はやや不整形で、北辺で4.0m、中心付近で  
4.3mを測る。方位はN5~8°Eとやや東に振る。南は  
SD0115に切られる。SI0127は上層にまとまった量の瓦

瓦を含んでいたため、サンプルとして北半の遺構掘り  
下げを行った。瓦を含むのは埋土上層の皿状に堆積し  
た土層であり、出土瓦は平瓦で量が少ない割に復元可  
能なもの4個体も含まれる。ある程度住居が埋まった  
段階で、選別された不要瓦を一括して投棄したものか。  
下層の堆積はいわゆるレンズ状でなく、ブロック  
状でありその状況から人為的に埋められた可能性が高  
い。埋土および床面出土の遺物は細片で、年代決定の  
手がかりは得られなかった。北壁付近の床面から鉄刀  
子出土し、北東コーナー床面には直径0.5m、深さ  
0.2mの貯蔵穴とみられる土坑がある。

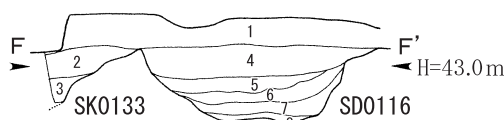
堅穴住居SI0128 (Fig. 7) 同様にSC0114の基底の地山面で検出した。大部分は調査区外に及び、北側をSD0116に切られるため、南東コーナーのみの検出である。東辺でN7° Eと少し東に振る。規模は東辺で少なくとも4.4m以上を測る。かなり削平され残りも悪く、SD0116付近では検出面に床面と壁溝が現れている。

堅穴状遺構SI(SK)0125 (Fig. 7・15) 調査区の東端で確認された。検出時には隅丸方形の堅穴住居状であった。上面に瓦溜まりを持ち、須恵器の出土が見られたため、サンプル的に遺構掘削を行った。その結果は、堅穴住居ではなく円形の土坑3基が重複したものであった。瓦は期待に反し上面に落ち込みとしてわずかに見られるのみで、後世の整地に伴い埋め込まれたと見られる。上層の土坑SK0125-1は、直径が約2.8m、深さ約0.15~0.3mの浅く広い土坑で、多くの須恵器、土師器片を含んでいる。8世紀前半代か。下層のSK0125-2は直径2m以上、深さ0.6mの皿状の土坑でわずかに土師器片を含む。SK0125-3は直径1.15m、深さ0.3m。遺物は含まず、底面に炭化物が多く見られた。



1. 10YR3/4 暗褐色土、砂混じり縮まりが無い
  2. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト、礫含む
  3. 10YR4/6 褐色粘質シルト、瓦片粗く含む
  4. 10YR4/6 褐色粘質シルト、瓦細片粗く含む
  5. 7.5YR4/4 褐色粘質シルト、瓦小片粗く含む
  6. 7.5YR4/4 褐色粘質シルト、瓦大形破片多く密に含む
  7. 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト、7.5YR5/8明褐色シルト質粘土ブロック少し混じる
  8. 7.5YR4/6 褐色シルト質粘土
  9. 10YR4/4 褐色粘質シルト
  10. 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルトやや縮まり無い
  11. 7.5YR4/4 褐色シルト質粘土
  12. 10YR4/4 褐色シルト質粘土
- 地山 10YR5/6 黄褐色シルト質粘土

Fig. 9 東回廊外溝Jラインセクション(1:50)



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
  2. 7.5YR4/6 褐色土、5YR5/8明赤褐色土混じる
  3. 7.5YR4/4 褐色土
  4. 7.5YR6/8 橙色強粘質シルト、炭含む
  5. 7.5YR6/6 褐色土、7.5YR3/3 暗褐色土混じる、縮まり無い
  6. 7.5YR6/6 褐色土と7.5YR3/3 暗褐色粘質土の大きなブロックが混じる
  7. 7.5YR4/6 褐色土、砂粒含む
  8. 7.5YR6/8 褐色シルト質粘土
- 地山 7.5YR5/8 明褐色土

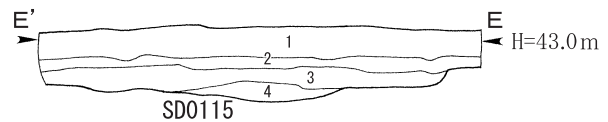
Fig. 11 東回廊内溝Oラインセクション(1:50)

### P・Q-1 トレンチ

検出された中門の中心を基に、中心伽藍の主軸線が伽藍地東西約180mの西から1/3に設定されていると判断された。そこで、更に1/3にあたる中心軸から東約60mに何らかの区画施設を求めて、回廊調査のトレンチを延長するかたちでP・Q区に南北2m×東西11mの調査区を設定したが、該当する遺構は検出されなかった。

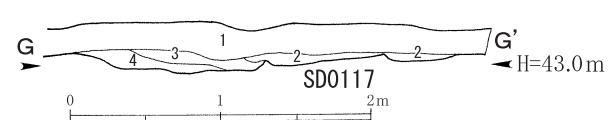
堅穴住居SI0129 (Fig. 8) トレンチを横断するように検出された。東西幅2.1mで、検出面から床面の深さ0.08mと浅い。東西壁際に幅0.2m、深さ0.06mの壁溝を有する。方位はほぼ正方位である。須恵器細片が出土したのみ。

堅穴住居SI0130 (Fig. 8) 南東コーナー部分のみが検出された。東西規模は3m以上ある。これもほぼ正方位。(藤原)



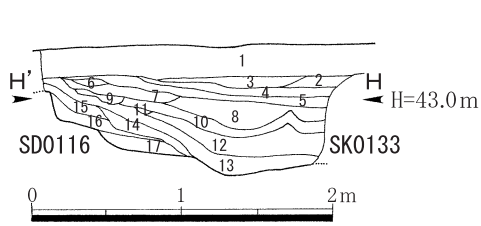
1. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト、礫含む
  2. 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト、縮まりあり密
  3. 7.5YR4/4 褐色粘質シルト10YR4/6 褐色シルト質粘土ブロック含む、瓦粗く含む
  4. 7.5YR4/4 褐色粘質シルト10YR4/6 褐色シルト質粘土ブロック含む、瓦小片混じる
- 地山 10YR5/6 黄褐色シルト質粘土

Fig. 10 東回廊外溝Lラインセクション(1:50)



1. 10YR4/3 オリーブ褐色土
  2. 10YR3/4 暗褐色土、瓦小片やや多く含む、炭含む
  3. 7.5YR4/6 褐色土
  4. 7.5YR4/6 褐色土、10YR5/6 明褐色地山土ブロック含む
- 地山 7.5YR5/8 明褐色土

Fig. 12 東回廊外溝Oラインセクション(1:50)



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
  2. 5YR6/8 棕色土
  3. 2.5YR6/1 黄灰色砂
  4. 7.5YR5/8 明褐色土
  5. 10YR4/2 灰黄色シルト
  6. 5YR6/8 棕色土
  7. 7.5YR5/8 明褐色土
  8. 10YR4/2 灰黄褐色土、焼土含む
  9. 5YR6/8 棕色土
  10. 5YR6/8 棕色土
  11. 5YR6/8 棕色土
  12. 10YR4/2 灰黄色シルト
  13. 10YR5/8 黄褐色粘質土、10YR4/4 褐色土ブロック含む
  14. 10YR4/2 灰黄色シルト
  15. 7.5YR4/3 褐色土、炭含む
  16. 7.5YR4/6 明褐色粘質土、7.5YR4/2灰褐色土ブロック多く混じる、炭含む
  17. 7.5YR4/6 褐色土、水分を含み、締まりが無い
- 地山 7.5YR5/6 明褐色土

Fig. 13 東回廊内溝拡張区セクション(1 : 50)

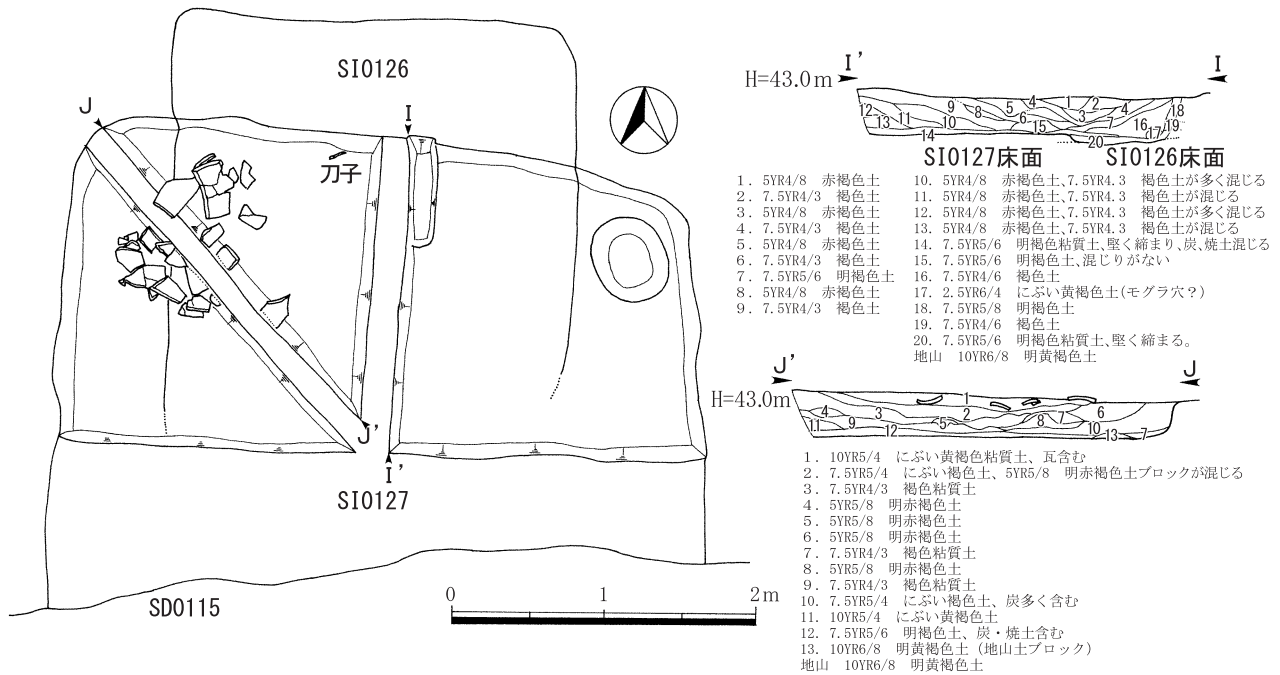


Fig. 14 竪穴住居SI0127実測図(1 : 50)

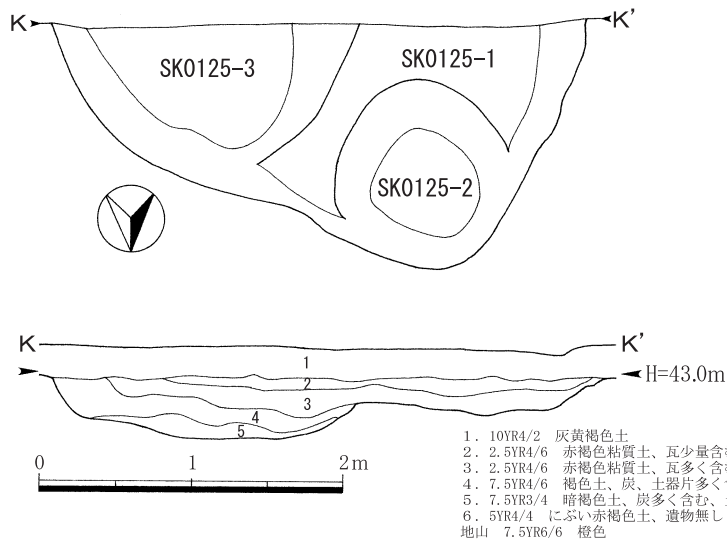


Fig. 15 竪穴状遺構SI0125実測図(1 : 50)

#### 4. 東回廊北東隅の調査

東回廊の北東隅を確認するために、東回廊南東入隅が確認されたJ区の北への延長線上で、金堂の真東に当たる部分に東西3m×南北9m調査区を設定し、必要に応じて拡張していった。

**東回廊SC0114** (Fig. 16) ここもまた、著しく削平され柱穴、礎石据え付け痕、基礎地形も残存しておらず、地山が露出し回廊そのものの痕跡は認められない。内溝SD0119と外溝SD0120の溝間が東回廊北辺と推定される。北辺の幅は約6.8mと南辺よりやや狭いようである。さらに東辺の幅を求めるため東拡張トレンチを設定したが、外溝は全く削平されたか検出できなかった。そ

のためこの調査区での東回廊東辺の幅は確認できていない。東回廊の南北規模はSD0120とSD0115間の距離50.1mとなる。

**東回廊内溝SD0119** (Fig. 16・17) SD0116の延長にあたる溝である。3.8m分を検出した。北端部はしっかりした矩形を呈する。上面には瓦溜まりが発達している。調査区南端のラインでは深さ0.3mを測るが、幅は調査区外にいたり確認できていない。

**東回廊外溝SD0120** (Fig. 16・18) 調査区北端にかかり東西によぎる溝である。上面の瓦溜まりは断片的にしか残っていない。東へ調査区を拡張して追いかけたところ、Kラインから東へ6mほどで、幅も狭く痕跡

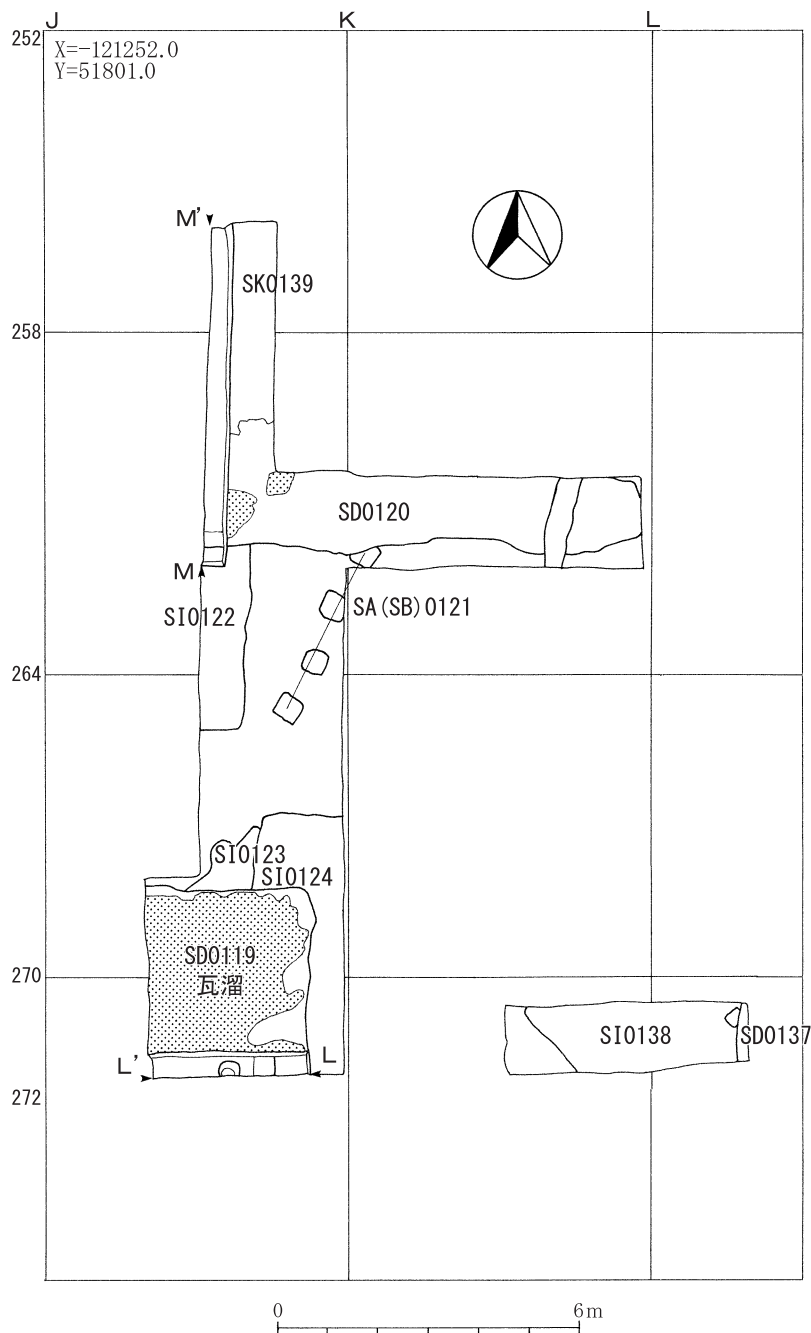


Fig. 16 東回廊北東隅付近遺構配置図(1 : 150)

状になって途絶えた。また、幅については、調査区西辺に添って北に延長したが、北側はSK0139に切られていて正確な幅は求められなかった。底面の形状からおよそ3m程と見られる。

**柱穴列SA(SB)0121** (Fig. 16) 東回廊SC0114の基底の地山面で、南北に並ぶ1辺約50cmの方形の柱穴を4基検出した。柱間はややばらつきがあるが1.2mである。状況から見て掘立柱建物のいずれかの妻にあたと見られる。方位はN26.5°Eと東に振れている。

**竪穴住居SI0122** (Fig. 16) 同様にSC0114の基底の地山面で検出された。西側大部分は調査区外で、北側はSD0120に切られる。東辺で3.6m以上を測る。方位はN2°Eと正方位に近い。

**竪穴住居SI0123** (Fig. 16) これもSC0114の基底の地山面で検出された。東側を別の竪穴住居SI0124に、南側をSD0119に切れ、北辺と北東隅部のみの検出である。方位はN45~50°Eと大きく振れている。北辺中

に半円形の突出部が見られる。

**竪穴住居SI0124** (Fig. 16) これもSC0114の基底の地山面で検出された。東及び南は調査区外に及び、南西はSD0119に切られる。規模は少なくとも南北5.1mあり、今回検出された中では最大規模である。方位はSI0122同様わずかに東に振れるようである。

**土坑SK0139** (Fig. 16・18) 北側拡張区で検出された。外溝SD0120の北側に広がる瓦溜まり土坑である。一部はSD0120の上面を覆っていたとみられ、東西8m以上に及び。埋土に締まりもないため、後世の瓦処理土坑と考えている。深さは約0.4mであるが、北寄りでは更に0.2mほど深い、瓦を含まない下層遺構が南北約1.5mの範囲で認められる。

**竪穴住居SI0138** (Fig. 16) 東回廊東辺の幅を検出するために設定した東拡張トレンチで検出した。西辺の一部と北西隅のみの検出である。方位はN50°EとSD0123に類似する。(藤原)

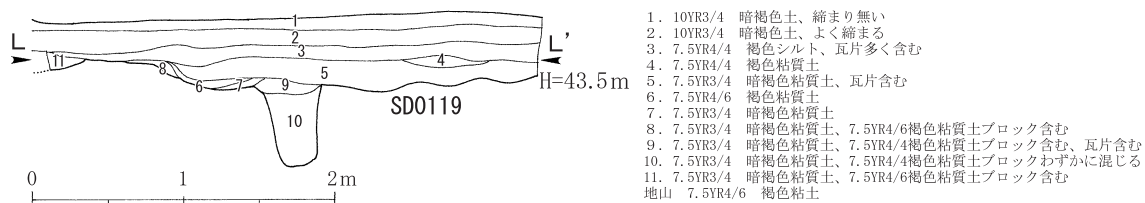


Fig. 17 東回廊北東隅内溝セクション(1:50)

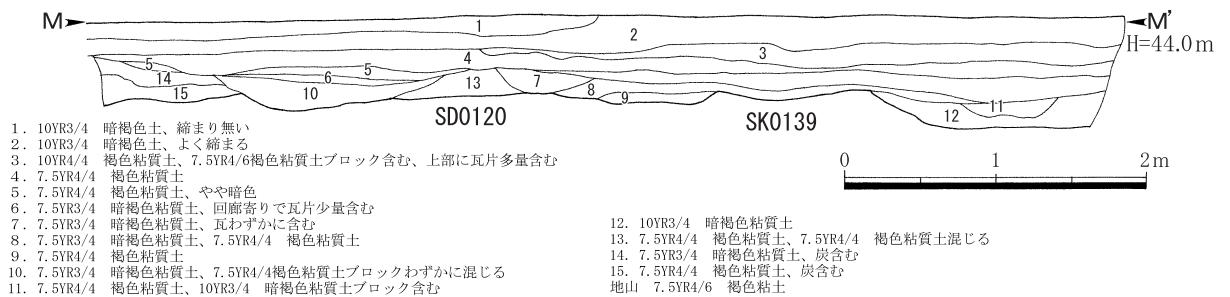


Fig. 18 東回廊北東隅外溝セクション(1:50)

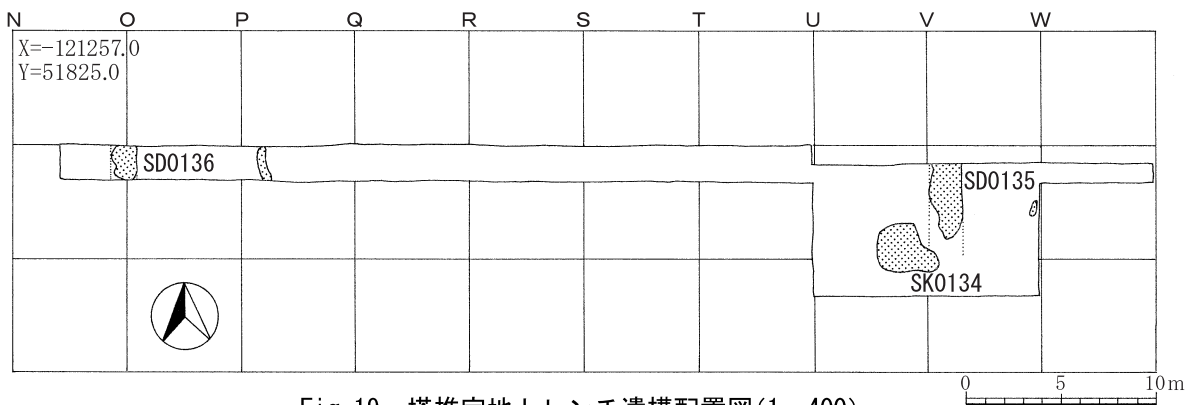


Fig. 19 塔推定地トレンチ遺構配置図(1:400)

## 5. 塔推定地の調査

金堂と東築地の間には広い空地があるが、ここにも瓦の散布が見られる。かつて、この地を水田化しようとして床下げを行った際に大量の瓦・塼が出土し問題となったことがあり。一連の発掘調査と保護活動の契機ともなった。そのため、塔跡の第一候補と考えられている。

今回の調査では、瓦の散布が多く遺構の残りも良さそうな北側（上段）旧水田がコスモス畑として利用されていたため対象と出来なかった。やむをえず、下段旧水田に東西57.5mのトレンチを入れ、必要に応じて拡張した。しかし、水田化されていたこともあり、遺構の残りは予想以上に悪い。そのため、遺構の詳細な調査は次年度に先送りし、上段部分の調査と併せて行

## 6. 南門の調査

中心伽藍の主軸を確実なものとするため、追加として南門の調査を行うことにした。ただし、詳細地形測量実施に伴う計画変更との関連から着手が2月以降となったため、作業は遺構の平面プラン検出に留め、現場はそのまま次年度調査に引き継がれる。よって、ここに記した内容は中間報告であり、来年度の調査の結果如何では大幅に訂正される可能性があることをあらかじめお断りしておく。

南門については、既に1990年の第3次調査西高木2地区で確認されたテラス状遺構SX01が南門の一部（南東隅）である可能性が指摘されていた。そこで、今回の調査では南門の全体を対象とすべく調査区を設定したが、現在も供用されている農道がちょうど推定地の中央で交差しているため調査区は大きく3つに分けざるを得なかった。

**南門SB0140** (Fig. 20) 南門基壇は更に著しく削平され柱穴、礎石据え付け痕、基礎地形も残存していない。南西E・F-8区ではわざわざ基壇部分を地山以下まで大きく抉って土を入れ替える土壌改良（攪乱土坑）さえ行われている。そのため、基壇の形状は外周の溝SD0143、SD0144そして第3次調査SD05に囲まれた地山部と判断せざるを得ない。

基壇の形状は、中門と異なり長方形の四隅を斜めに切り落としたような東西に扁平な八角形状を呈する。南北幅は11.2m、東西幅は基準の求め方によってやや差が出るがSX01の東辺と柱穴列SA0153との間とすれば17.6m、北辺は15.5m、東辺およそ7.5mを測る。

うこととした。

**溝SD0136** (Fig. 19) トレンチ西端から2.5m、東回廊東辺から15.5mの地点で瓦を含む南北溝が検出した。掘り方はほとんど検出不可能で瓦の散布範囲で溝と判断する状態である。方位はほぼ正方位で、幅は1.5m。

**溝SD0135** (Fig. 19) トレンチ西端から東に45.5mで溝を検出した。一帯を拡張したところ延長約4mを確認した。この溝も同様で残りが悪い。方位はほぼ正方位、幅は1.8mである。

**土坑SK0134** (Fig. 19) SD0135の南西に位置する。南北2.5m×東西3mのやや不整な隅丸方形の土坑である。瓦を大量に含み、後世の瓦廃棄土坑と見られる。  
(藤原)

**柱列SA0153** (Fig. 20) 基壇西辺に添うように、方形のピット2基が南北に並んでいる。基壇と築地外溝SD0151埋土の両方を切っている。位置的に足場穴の可能性も考えられるが、それにしてはやや大きすぎるため性格は不明である。

**築地SA0141** (Fig. 20) 大部分が道路下にあるため、D・E・F-8区で南辺のみが延長約7mにわたり検出された。全く削平され、基底の地山面が検出されるのみである。南門の西妻中央に取り付くと仮定して折り返すと基底部幅3mが求められる。

**溝SD0142** (Fig. 20) 南門の外周溝である。道路下の推定築地内溝から連続すると見られる。やや北に振りながらH-7区南辺に現れると、60°北西に曲がる。この部分は幅約1.6m程で、約3m北西に延びる。そして、再び60°西に振って西進する。この東西方向部分で幅2.2mと広いが、約4.8m西の地点で急に1mに狭まる。ちょうど南門中心の北面にあたるためこの狭まった部分は南門と中門を結ぶ通路を意識したものと考えられる。

**溝SD0143** (Fig. 20) D・F-6南トレンチで検出SD0142の続きと考えられる。東から西に延びる溝が60°南に曲がり調査区外に至る。この部分は比較的残りは良く、コーナー部に軒瓦を含む瓦溜まりが見られる。調査区南壁付近で幅2.4m、深さ0.6mの逆台形を呈する。下層からも瓦の出土が見られた。

**溝SD0144** (Fig. 20) 南門の外溝である。南側は調査区外のため幅は不明。西側は築地外周溝SD0151に切られている。南門前を完全に遮断せず、南門南西隅から

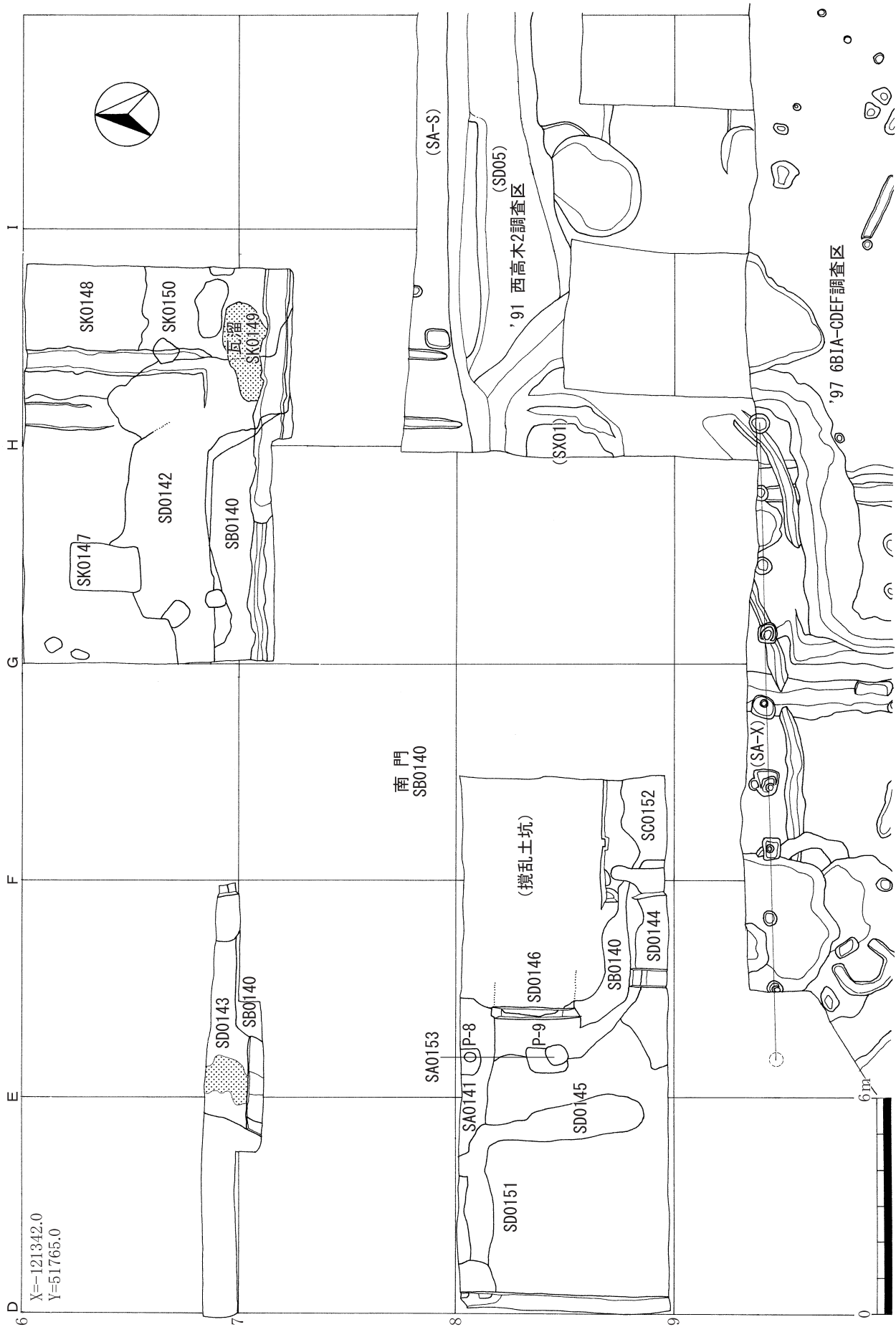


Fig. 20 南門付近遺構配置図(1 : 150)



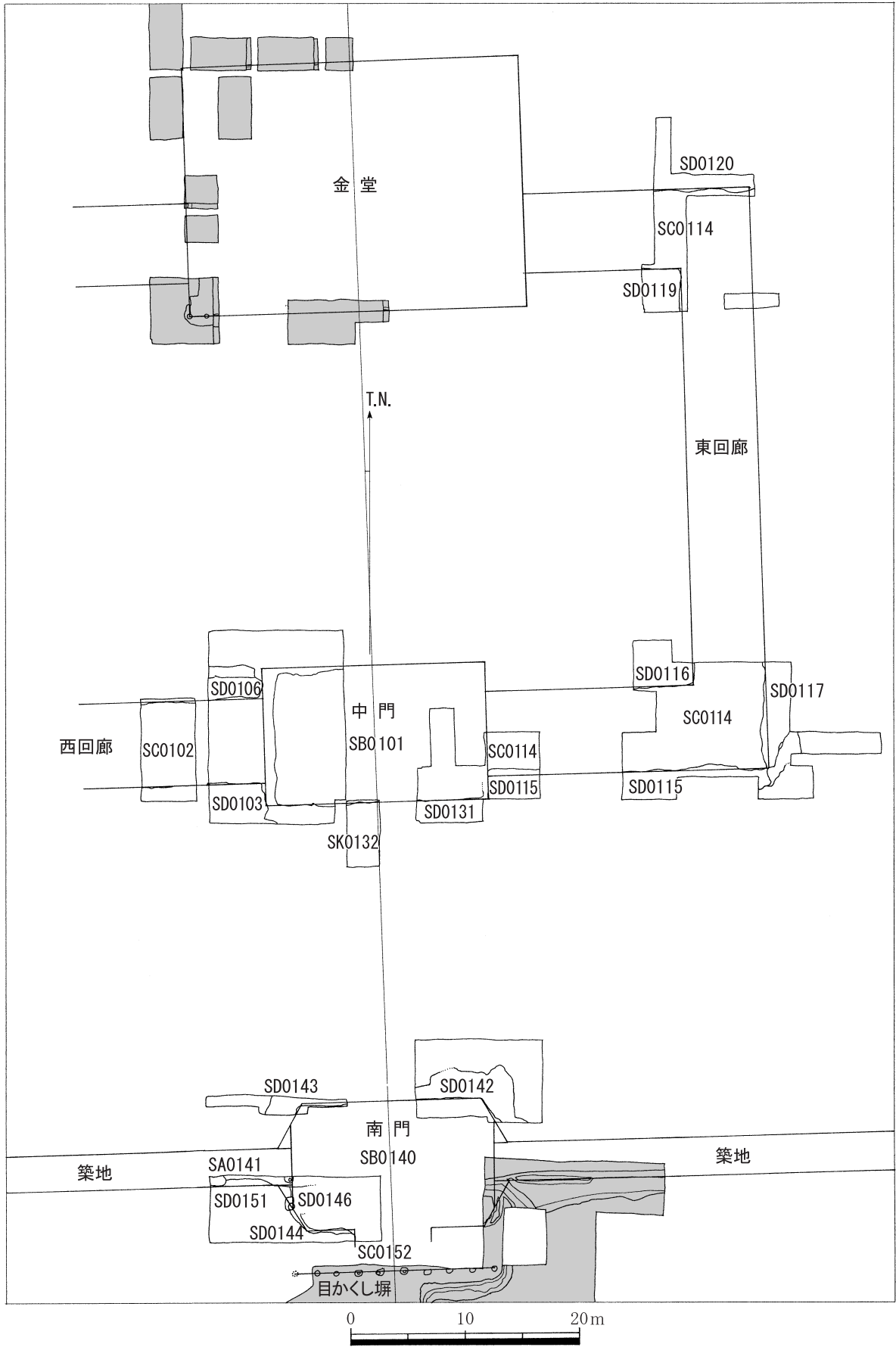


Fig. 21 遺構復元図(1 : 500)

### Ⅲ. まとめ

#### 検出遺構の概要 (Fig. 21)

今回の調査では、中門、回廊（主に東回廊）そして南門の位置が確認できた。しかし、規模の推定根拠となる基壇の残存状況は南の遺構ほど悪化している。中門ではかろうじて基礎地形の最下層が残存するのみ、南門では基礎地形さえも削剥されている有様であった。それ故、規模の推定には基壇外周に掘られた溝が唯一の手がかりであり、それさえも上部が削られ、本来のラインを留めていない可能性が高い。よって、以下に推定する法量はかなり無理をして算定したものであることをあらかじめお断りしておく。

**中門** 中門から金堂の基壇までの距離は約31mを測る。天平尺（尺=0.2963m）に換算すると（以下同じ）105尺（31.12m）である。

先にも述べたように基礎地形の最下層のみが残り版築構造さえ見ることは出来ない。また、東西端では失われている部分もある。

中門の南北規模は基礎地形の最大幅が11.85mであり、天平尺ではほぼ40尺となりこの数値は妥当であろう。東西規模は、基礎地形の端部の残存状況が良くないので東西回廊外溝間の最短距離19.5mを参考にして求めた65尺（19.26m）が収まりが良いように思える。上部構造を復元するような手がかりは全く得られなかった。

前面には、大規模な瓦溜まり土坑SK0132が存在する。上面から出土した遺物から9世紀前半頃の年代が得られるので、その頃に大規模な改修が少なくとも1回行われていると見られる。

**回廊** 今回の調査では、東回廊を主に回廊の構造が明らかになった。プランは中門と金堂を結び、金堂院を構成する型式であることが確認された。

著しい削平を受けており柱穴や礎石抜き取り痕はもちろん基壇や基礎地形の痕跡、などは全く残されておらず。内外周溝の間を回廊基底と判断するしかない。

東回廊の規模については、中門の中心から東辺の距離が34.15m、北辺から南辺の距離が50.1mを測り、それぞれ115尺（34.07m）、170尺（50.37m）と推定される。回廊全体では東西230尺×南北170尺と復元できる。

また、伊勢国分寺の回廊の場合南、東、北それぞれの辺で基壇（正しくは基底）幅に差があることが認められる。南辺では平均して7.2~7.4mの数値が得られ、24尺（7.11m）と考えられる。東辺では6m前後であ

り、20尺（5.93m）が採用されている。北辺幅については調査範囲が限られるため正確に求められていないが南辺よりやや狭い6.8m前後の数値が得られているので23尺（6.81m）が妥当であろう。このように各辺の基底幅を変えることにどのような意義があるのか、またそれが上部構造にどのような影響を与えるのかは今後の検討課題としたい。

なお、外周溝については一般的に雨落ち溝とされることが多いが、伊勢国分寺の場合瓦溜まりの下層にも0.5m以上の掘り込みがある。このような推定深さ1m以上、幅2.5m以上の大規模な堀が回廊の内外を巡っていたことは考えがたく、おそらく築造時及び改築時に、版築用の地山土を採掘し、また不要な土砂や瓦を主とした廃材を処理するために掘られたものであろう。本来の雨落ちは更に上層にあり、残存していないと考えられる。

**南門** 南門は中門から26.1m、ほぼ88尺（26.07m）の距離で確認された。

南門基壇は更に著しく削平され基礎地形も残存していない。外周溝から判断される基底の形状は、長方形の四隅を斜めに切り落としたような東西に扁平な八角形状を呈する。このような例は他にあまり類を見ず、この平面プランが上部構造まで影響を与えていたのか、単に基礎工事の際の労力削減によるかは今後の検討課題である。

南北幅は11.2mを測り、38尺（11.26m）であろう。東西幅は17.6mを測り、ほぼ60尺（17.8m）という規模が推定される。

基壇南面には推定幅7m前後（23~24尺）の陸橋状の構造があり、北面も対応するように溝の幅が狭まっている。おそらく、この幅が伽藍中央に至る通路の幅となるのであろう。

南門に取り付く築地は幅全体を検出できなかったが基底幅が3m（10尺）と推定される。

また、隣接する博物館関連調査に際し検出された柱穴列（註3）の重要性が、今回の南門の調査で再確認された。この柱穴列は南門基壇南辺から南に4m離れ平行するもので、8間分が検出されているが、おそらく更に西に1間分が推定される。すると幅が全く南門基壇と等しく、密接な関係が窺える。足場穴とするには距離が離れすぎているので、南門の大改修の際に伽藍地内部が見通せないように設置された目隠し扉ではないかと考えている。この柱列の振れより中軸線の振れ

約4.5m東に延びて途絶えるため。南門中央前面は陸橋状(SC0152)を呈する。

**溝SD0146** (Fig. 20) 南門基壇下で検出された溝。幅2.2m、深さ0.25mの断面皿状の溝。築地外周溝SD0151を切ったりしていないので、基壇築造前に存在したか。

**溝SD0151** (Fig. 20) 築地SA0141の外溝にあたるが、南北幅が5mを越え更に南に広がる土坑状の溝である。調査区西壁では深さ0.6mあまりで、底面はほぼ平坦

## 7. 出土遺物 (Fig. 23~32)

今回の発掘調査は遺構の位置、規模の確認が主眼であって、極力遺構の掘り下げは行っていない。遺構検出に伴う攪乱層の除去、あるいは部分的な断ち割り調査に伴うもののみであるにもかかわらず、出土遺物は整理箱26箱、土嚢袋194袋という膨大な量となった。大部分は瓦片でまだ洗浄も1/3しか完了していない。特に瓦類についてはとりあえず調査時にピックアップした遺物のみを報告する。また、南門出土瓦は除外し、次年度に報告としたい。

**瓦** 瓦の分類は新田に基づく(註2)。

**単弁八葉蓮華文軒丸瓦IIA03** 外縁を有するもの(1~4, 6)と削り取ったもの(5, 7, 13)がある。いずれも中門付近に集中している。

**単弁八葉蓮華文軒丸瓦IIA04** (8, 9, 11, 12, 14~17) IIA03の範を彫りなおしたもので、圏線の幅が太くなっている。主に東回廊からの出土である。

**重圏文軒丸瓦** (10) 中門外溝から1点のみ出土した。**均整唐草文軒平瓦IIB01** (18, 20, 22, 24~51, 53) 中門、東回廊ともに今回の調査では1点を除きこの型式であった。瓦当左上に目立つ範傷を持つ。

**重廓文軒平瓦** (52) 東回廊南東コーナー付近の小ピットからこの1点のみ出土した。

**押印瓦** (19) 円形の印面に「申」と読める。SI0125上面の瓦溜まりから出土した。

**磚** (21, 23) これもSI0125上面瓦溜まりからの出土。中門付近では磚の出土は極めて少ない印象を受ける。

**平瓦** (54, 61) いわゆる瓦溜出土の丸瓦、平瓦には完形に復元できる個体は少ない。これらはSI0127上面に投棄されていたものである。他に2個体が復元でき一括投棄されたものであることがうかがえる。

**土器** 土器類は土師器・須恵器・灰釉陶器が整理箱に2箱程度出土した。

である。2層ほどの瓦層を含む。

**土坑SK0147** (Fig. 20) 溝SD0142を切る。南北2m、東西1.3mの方形土坑で、外周に焼土、炭がわずかに見られる。

**土坑SK0149** (Fig. 20) 東西2.8m、南北1.2mの長楕円形の瓦溜土坑である。SD0142の上層瓦溜が部分的に残存したものか。(藤原)

**須恵器** (55) 瓶または壺類の底部と見られる。SI0125上層出土。

**須恵器蓋** (56) 笠状の天井部を有する。F-2区瓦溜上面出土。

**須恵器坏** (57・58) 高台を有する。SI0125上層出土。

**灰釉陶器皿** (59) 高台は矩形で、外端部で接地する。F-3区瓦溜上層出土。

**土師器甕** (60) 丸底で、薄手の甕である。SI0125上層出土。

### 鉄製品

**鉄刀子** (62) 長さ6.6cm、刃渡り3.9cmの小形品で、基部に木質が付着する。SI0127床面出土。

### 石器

**磨製石斧** (63) 刃部の破片である。両刃で、刃部幅3.6cm。表面の風化が著しい。灰緑色。回廊北東部隅表土出土。(藤原)

註2 伊勢国分寺跡出土瓦の分類として浅尾悟1991、1992および新田剛1998があるが、新田が22~24次調査の報告で新たに詳細な分析を行っているのでそちらを参照されたい。

を求めるとおよそ $N1.6\sim 1.8^{\circ}W$ といった数値が求められる。

**塔** 金堂と東築地の中間地点の瓦散布地に延長57.5mの東西トレンチを設定したが、遺構の残りは極めて悪かった。ただ2条の瓦を含む溝状遺構がちょうど41.5m(140尺)の間隔を置いて平行しているのが確認された。あるいは、塔院回廊の溝の一部である可能性も考えられ、次年度の調査に期待を託したい。

**下層遺構** 下層遺構として、掘立柱建物2、堅穴住居9、土坑、溝等多数を検出している。出土遺物から6世紀後半から8世紀前半代まで一般的な集落が営まれていたことが窺え、方位によっていくつかのグループ分けが可能である、うち正方位に近いものはSI0127を含め奈良時代前半のものであろう。(藤原)

註3 1997年18次調査の6B1A-CDF調査区の結果(未報告)に基づく。

### 伽藍配置の基本設計 (Fig. 22)

伊勢国分寺では講堂、金堂、中門、南門を一直線に配置し、中門から延びる回廊が金堂に接続するいわゆる東大寺式の伽藍配置が採用されている。塔を除く主要伽藍の配置・規模は陸奥国分寺、遠江国分寺、但馬国分寺などに類似例が求められ、伊勢国分寺では東に塔が想定される点や、全体のバランスを考えると陸奥国分寺に近似するものと思われる。

国分寺造営には独自の基準尺が用いられていたことも充分想定できるが、伊勢国分寺の場合建物の柱間など詳細が判明していないため、一般的に建物の基準尺として使われていたと考えられる天平尺(0.2963m)を使用した。基礎地形と基壇上面での規模の相違が考えられるが、検出された地形の数値を採用した。

金堂中心から講堂北面、中門南面の距離がほぼ180尺に等しく、これを5分割して36尺方眼を設定した。

金堂はほぼ方眼の2ブロック間を基準に南北幅(74尺)とし、約1.4倍の長さを東西幅(103尺)としている。講堂は南北幅を方眼の2ブロック、中門は1ブロックを基準として(講堂70尺、中門40尺)、約1.6倍の長さを東西幅(講堂110尺、中門65尺)としている。これらはそれぞれ裏尺矩形(1: $\sqrt{2}$ )、黄金矩形(1:1.618)を採用し設計されたと考えられる。

回廊は幅など不安定な要素(註4)を含むが、1つの案として金堂中心と中門中心の4.5ブロック間を基準としてその約1.4倍の長さを東西回廊の外端幅とし、中門東西面中央に南面回廊の中軸を、金堂中心からおおよそ0.5ブロック南のラインに北面回廊の中軸をそれぞれ設定して幅23~24尺の回廊を接続したと考えられる。東西面回廊は南北回廊に比べ実測値でも1mほ

ど幅を減じていることから、現時点では20~21尺であろうと考えている。回廊の東西南北外端間の規模は230×170尺と推定できるだろう。

南門は中門中心から金堂北面の距離(3.5ブロック)を南に折り返した地点に中心を置き1ブロックを基準にほぼ黄金矩形(60×38尺)に設計されていると考えられる。

中門と南門は同一規格と推定されるが、実測値では中門の奥行きが若干大きく計測されているため、南門より中門の規模を大きく作ろうという意図があったと考えられ、このことは金堂と講堂奥行きについても同様であったと思われる。

築地塀についてはおおよその規模しか判明していないため、従来言われている約180m四方を参考に36尺方眼に合わせて完数尺で想定した。南門の中央東西軸に合わせて幅10尺の築地塀が接続することが分かっている。これを基準に南辺を設定し、主要伽藍の中軸線を築地塀全体の西から1/3の位置に合わせた。南北、東西共に築地心々間で16.5ブロック(594尺)に復元できるであろう。

各建築物心々間の距離は南門・南辺築地~中門3.5ブロック(126尺)、中門~金堂4.5ブロック(162尺)、金堂~講堂4ブロック(144尺)、講堂~築地北辺4.5ブロック(162尺)、主要建物中軸から築地東辺、西辺間はそれぞれ11ブロック(396尺)、5.5ブロック(198尺)と想定できよう。

以上が現時点での大まかな基本設計復元案である。36尺方眼の中央の18尺ラインに基準となる点が置かれている状況から18尺方眼が基準となっていた可能性も考えられるが、図示する場合に煩雑になるためここでは36尺方眼で設定した。

塔・経蔵・鐘楼・僧坊等築地塀内にあったと考えられる建物、伽藍地、寺院地の位置・規模が判明すれば、より正確な基本設計の復元が可能となるだろう。

註4 北面回廊中軸の設定については、ラインとの若干のズレが生じ検討の余地がある。

### 今後の課題

1・2次調査の結果から伊勢国分寺伽藍地の四至は約180m四方、中軸はほぼ座標軸に一致すると推定されていたが、伽藍地内の23~25次調査において主要建築物の位置・規模が判明しその主軸は西に $1.7^{\circ}$ ほど振れることが明らかとなった(Fig.21)。この西偏主軸を伽藍地の築地に当てはめ、堂跡2・3で検出された溝を築地内外溝コーナーの一部として採用すると、築地北辺とされている西谷3の溝はラインから外れてしまう。(Fig.2)

この場合3つの案が考えられる。

1. 伽藍地の形を正方形とすれば西谷3の溝は別の遺構であり、北側に区画の存在も想定できる。
2. 西谷3、堂跡2・3の両溝を活かして考えれば築地西辺を東辺より若干大きく取り、北辺が斜辺となる台形状の伽藍地を想定できる。
3. 西谷3の溝を南北辺に対して東西辺がやや長い長方形の北辺とすると、36尺方眼のラインにほぼ一致する伽藍地が考えられる。

このように伽藍地の規模・形は未だ確定的ではなく、それは1・2次調査が小規模調査であったために築地内外溝とされた遺構は部分的に検出されたにすぎず、不確定要素が少なくないことに起因している。従来言われている約180m四方の規模から大きく隔たるとは

思われませんが、伽藍地築地の規模・形・方位の確定を目的とした四隅の検出および東・西・北門を含めた四辺の詳細調査も、塔・経蔵・鐘楼・僧坊等伽藍地内にあったと考えられる建物、寺院地の調査と共に今後必要であろう。(林)

【参考文献】

新田剛他1990『伊勢国分寺跡―第2次発掘調査概要』鈴鹿市教育委員会  
浅尾悟1991『伊勢国分寺跡―第3次発掘調査概要報告』鈴鹿市教育委員会  
浅尾悟1992『伊勢国分寺跡―尼寺跡推定地の調査―』鈴鹿市教育委員会  
新田剛1998『伊勢国分寺の軒瓦』『八賀先生退官記念文集 かにかくに』  
八賀先生のご退官を記念する会  
新田剛2002『伊勢国分寺跡1』鈴鹿市教育委員会  
山路直充ほか1994『下総国分寺跡 平成元年～5年度発掘調査報告書』  
市川市教育委員会  
斉藤忠ほか1995『遠江国分寺跡の調査』財団法人静岡県埋蔵文化財調査  
研究所  
狭川真一ほか1997『筑前国分寺跡(特)』太宰府市教育委員会  
大橋泰夫1999『下野国分寺跡XIV』栃木県教育委員会  
角田文衛編1986ほか『新修国分寺跡の研究』吉川弘文館

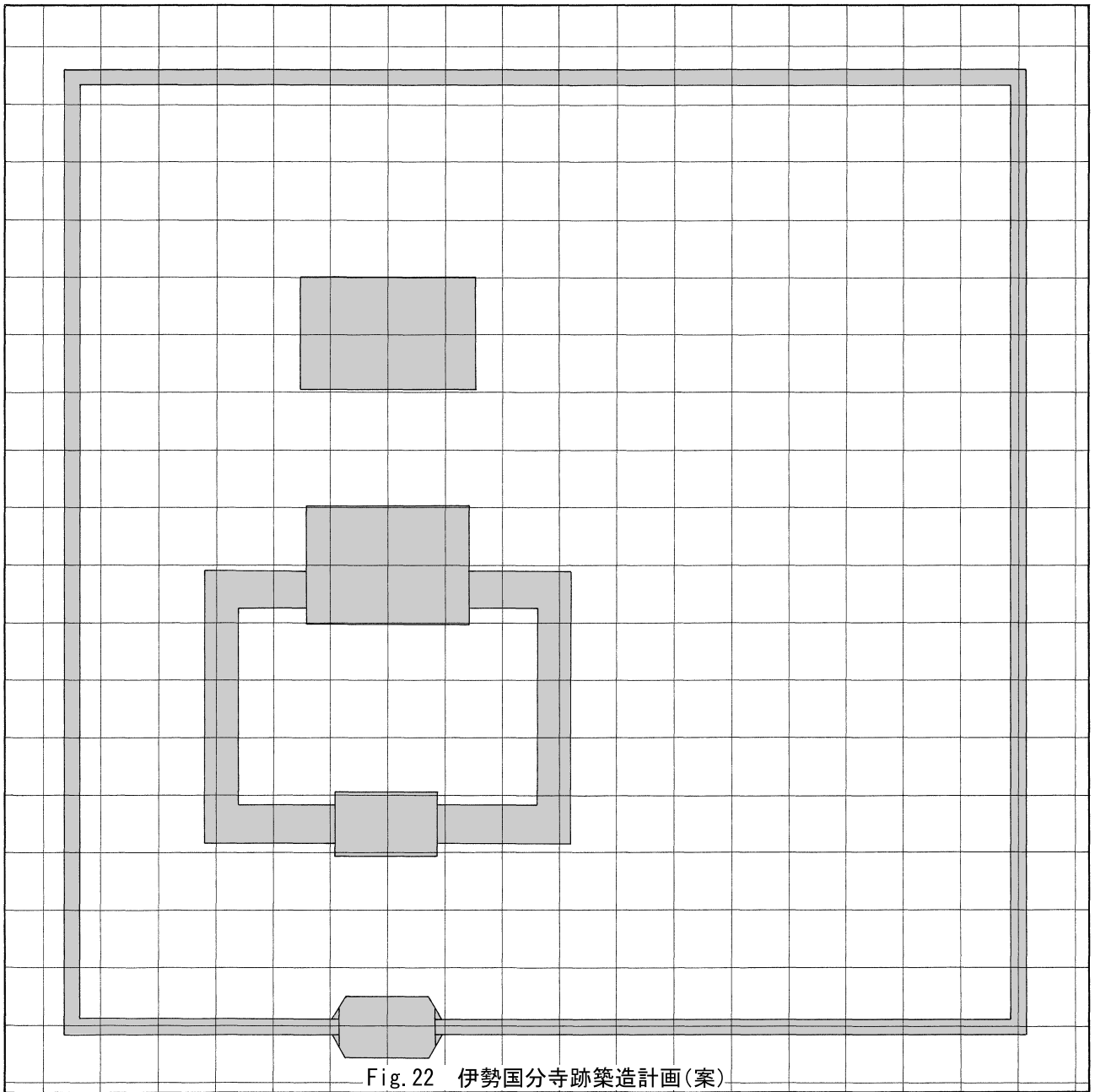


Fig. 22 伊勢国分寺跡築造計画(案)

0 50 100尺

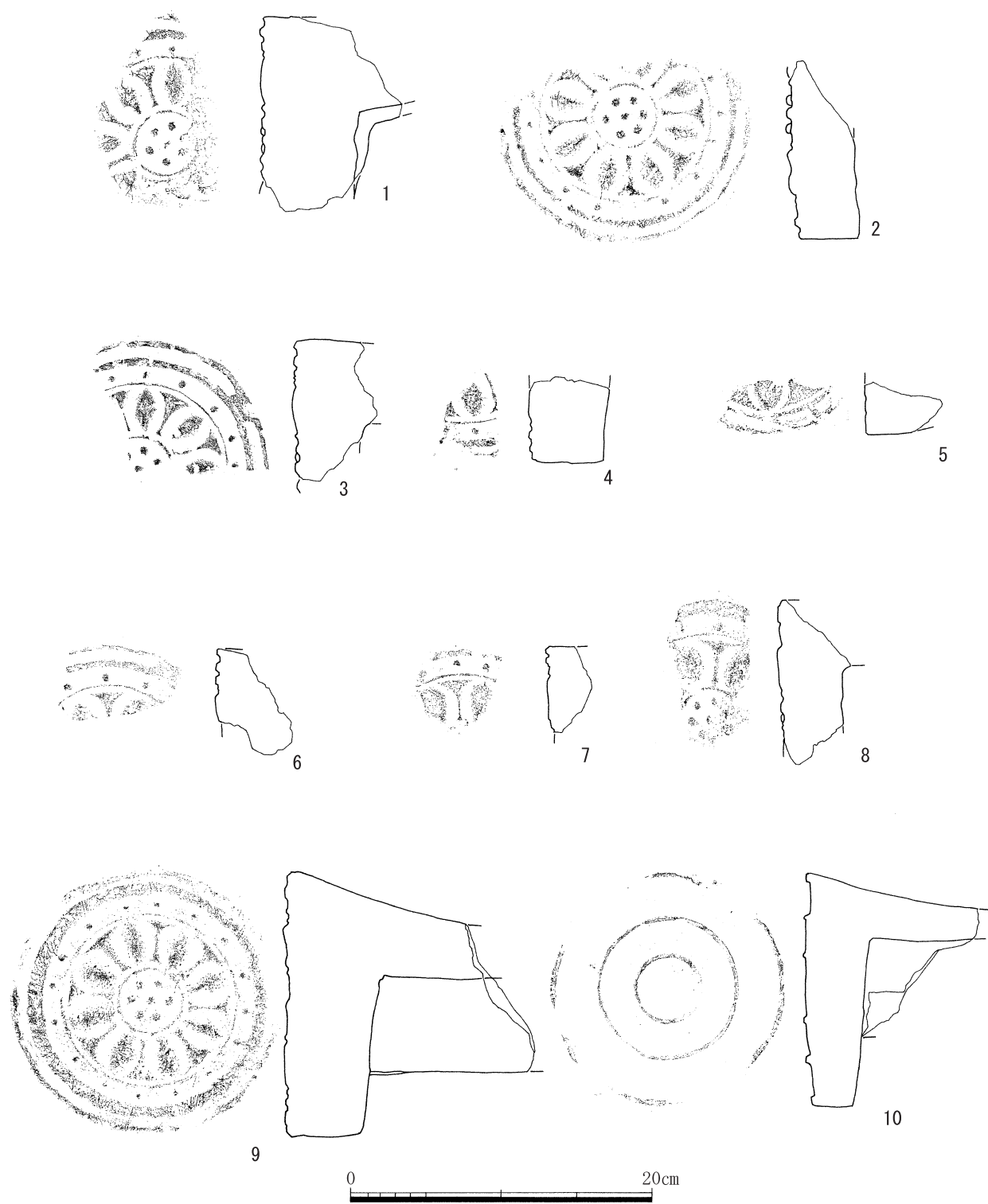


Fig. 23 軒丸瓦(1)

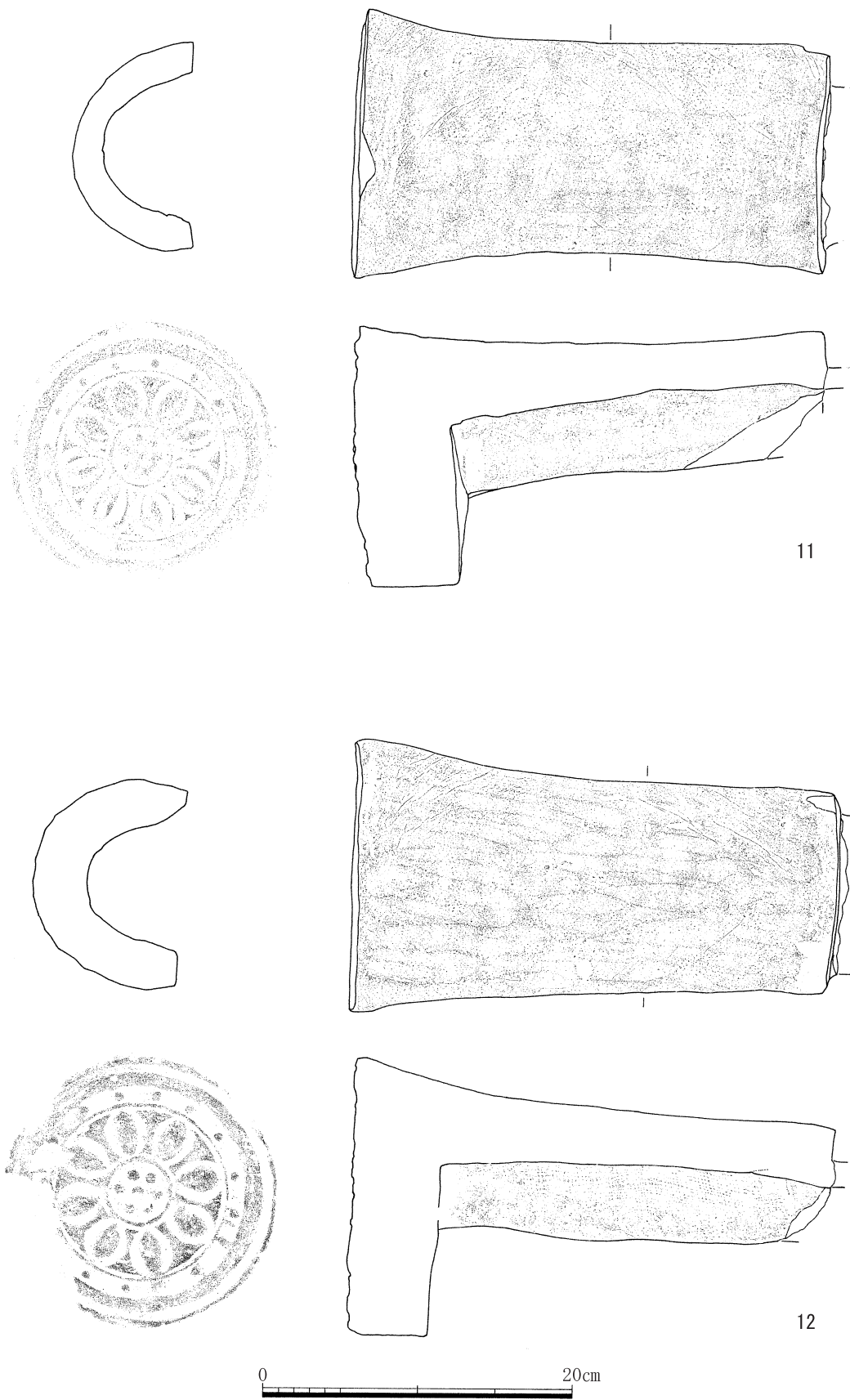


Fig. 24 軒丸瓦(2)

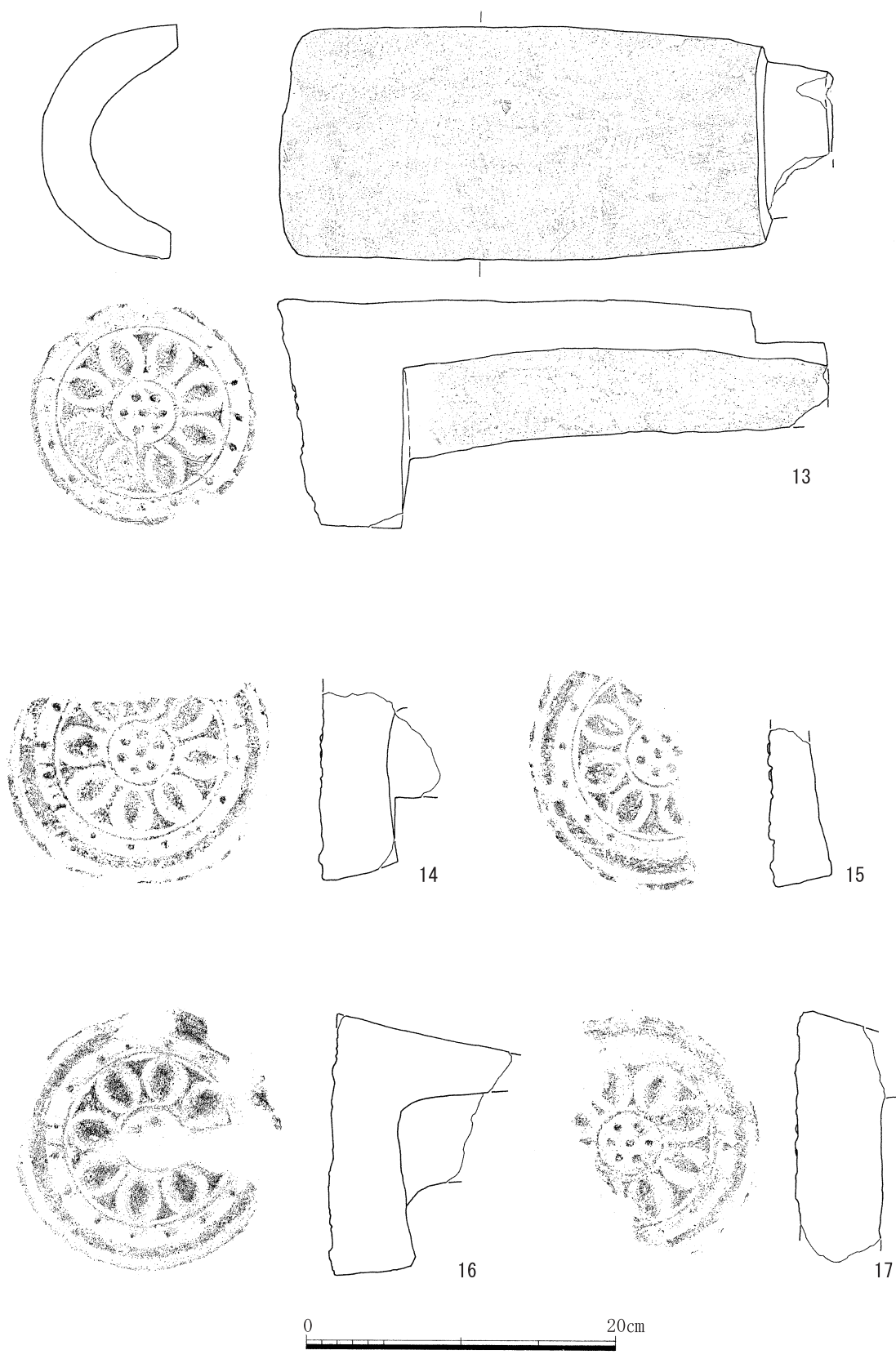


Fig. 25 軒丸瓦(3)





Fig. 26 軒平瓦(1)・押印瓦

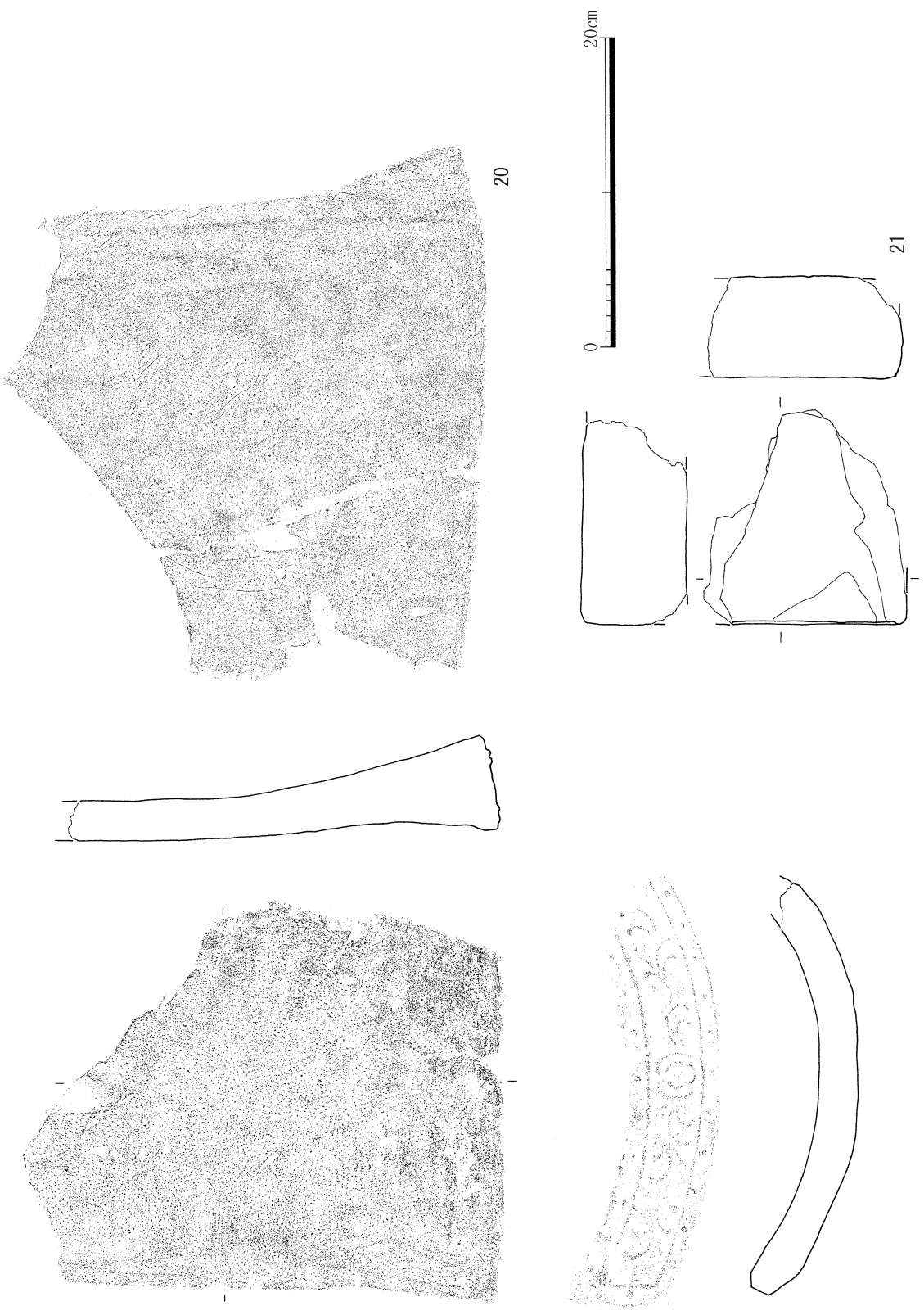
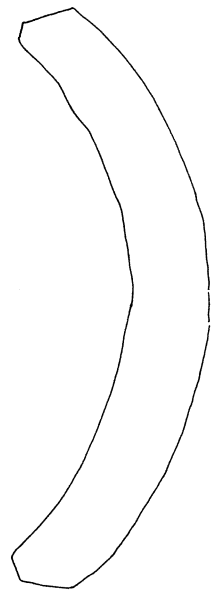
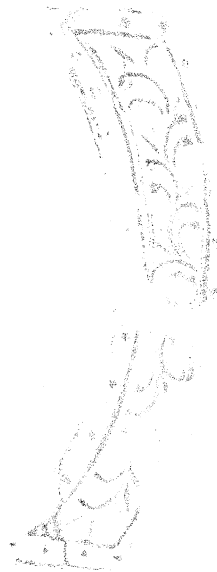
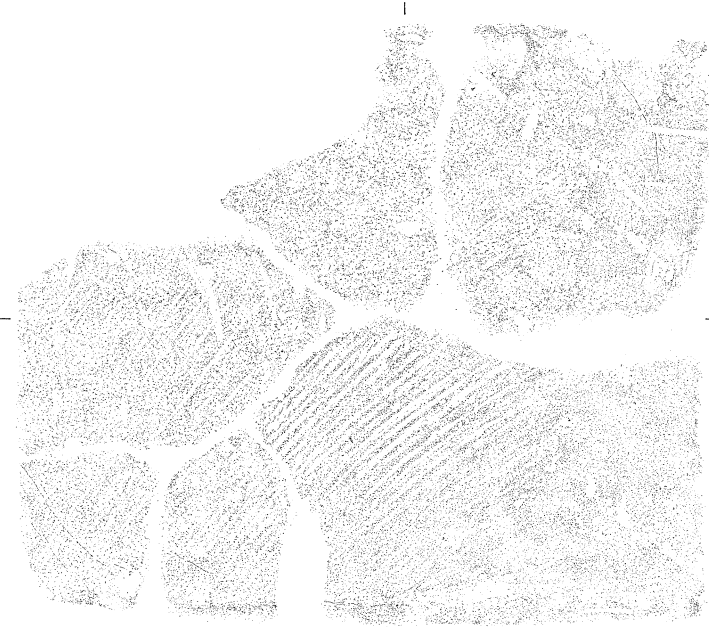
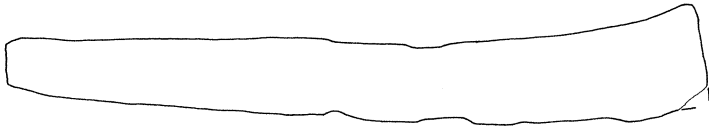


Fig. 27 軒平瓦(2)・博(1)



22



23

20cm

0

Fig. 28 軒平瓦(3)・塼(2)

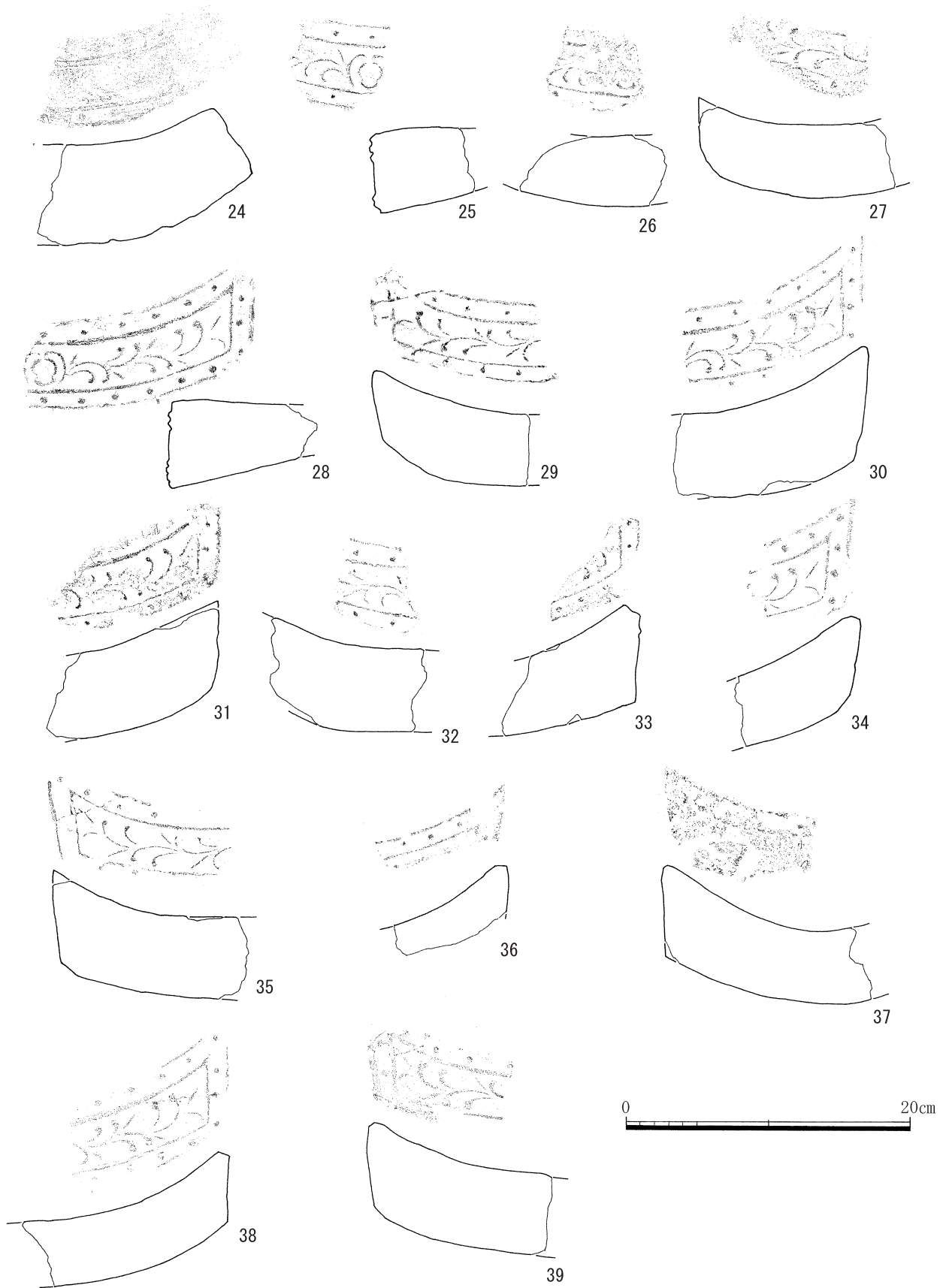


Fig. 29 軒平瓦(4)

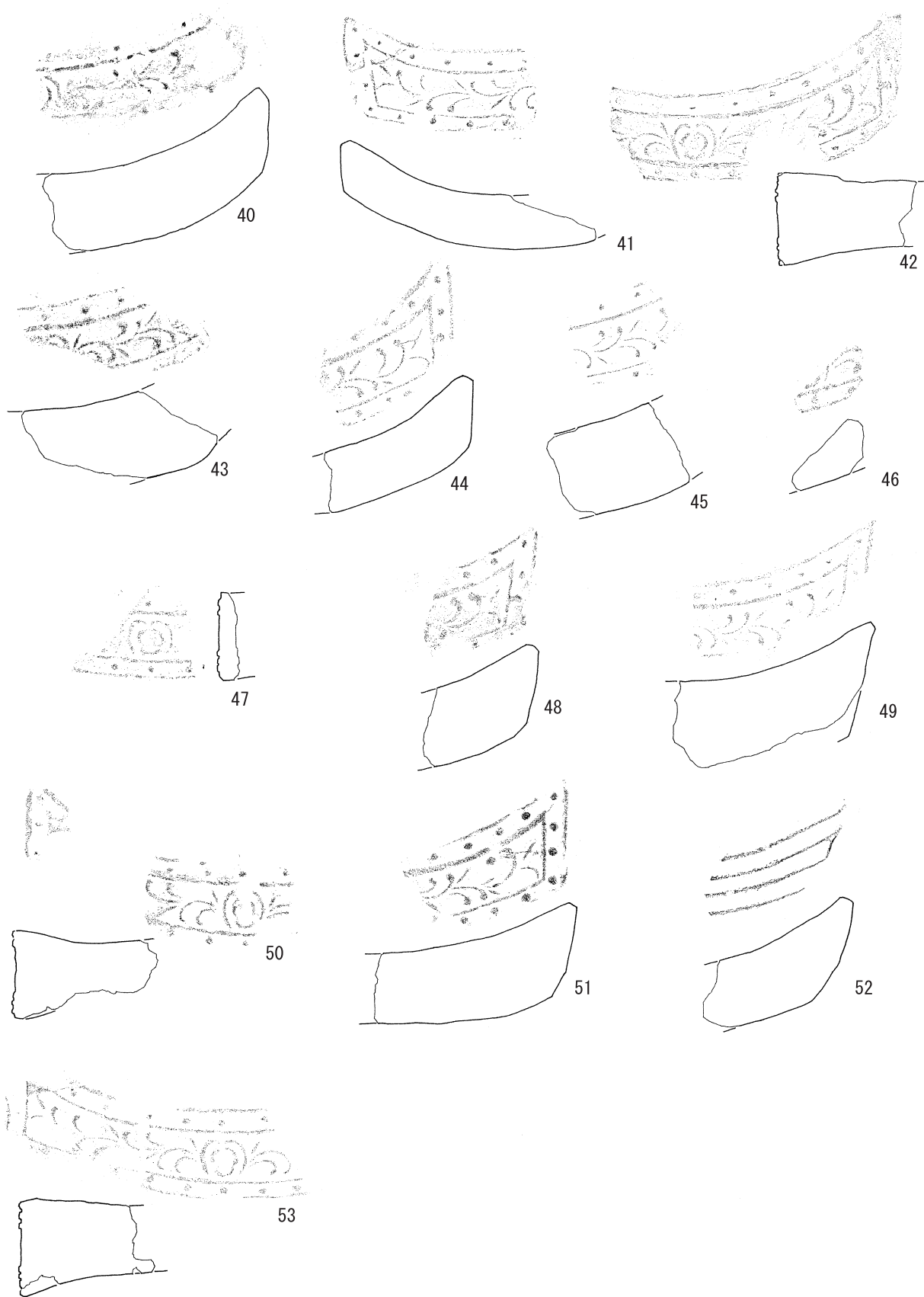


Fig. 30 軒平瓦(5)

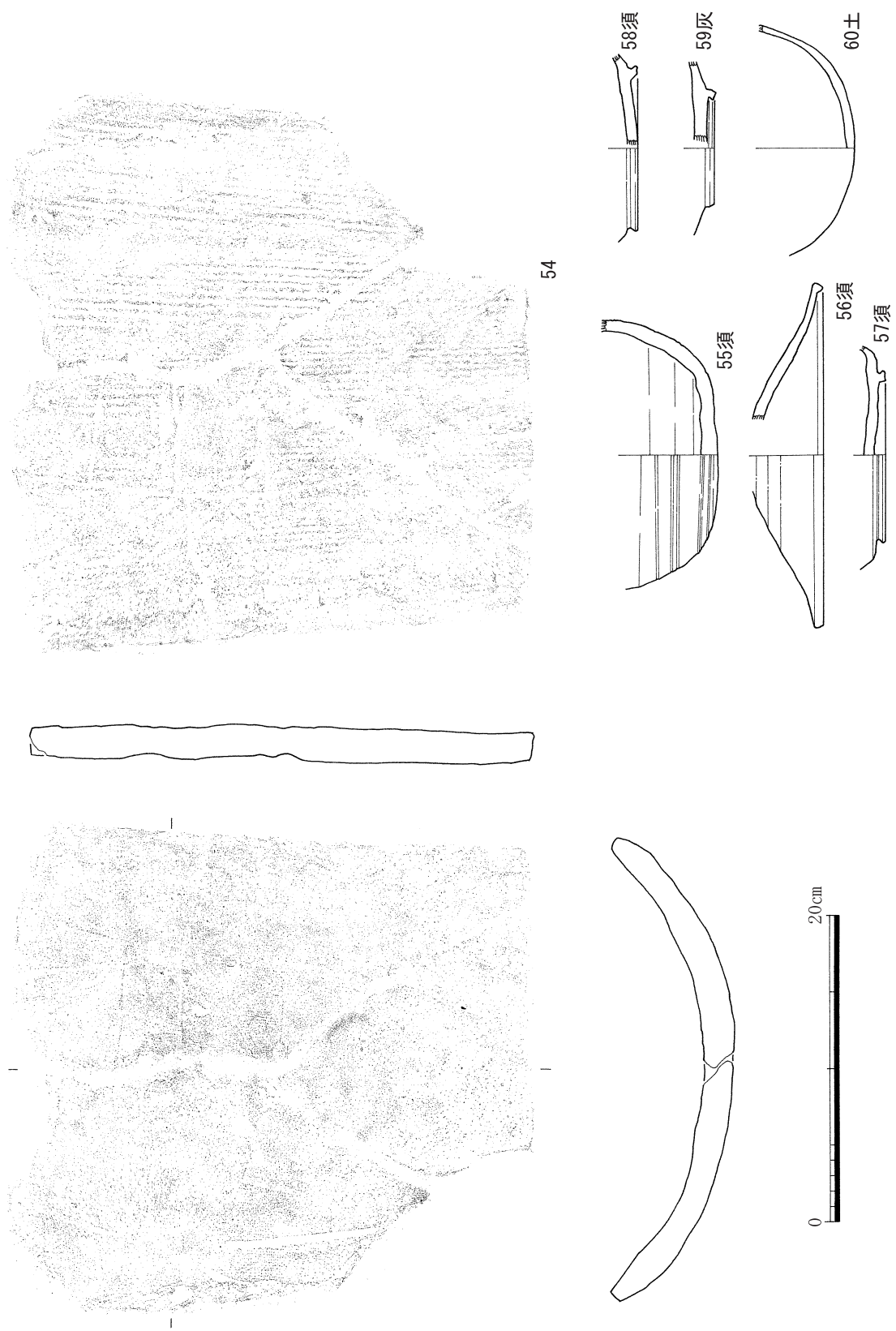


Fig. 31 平瓦(1)・須惠器・灰釉陶器・土師器

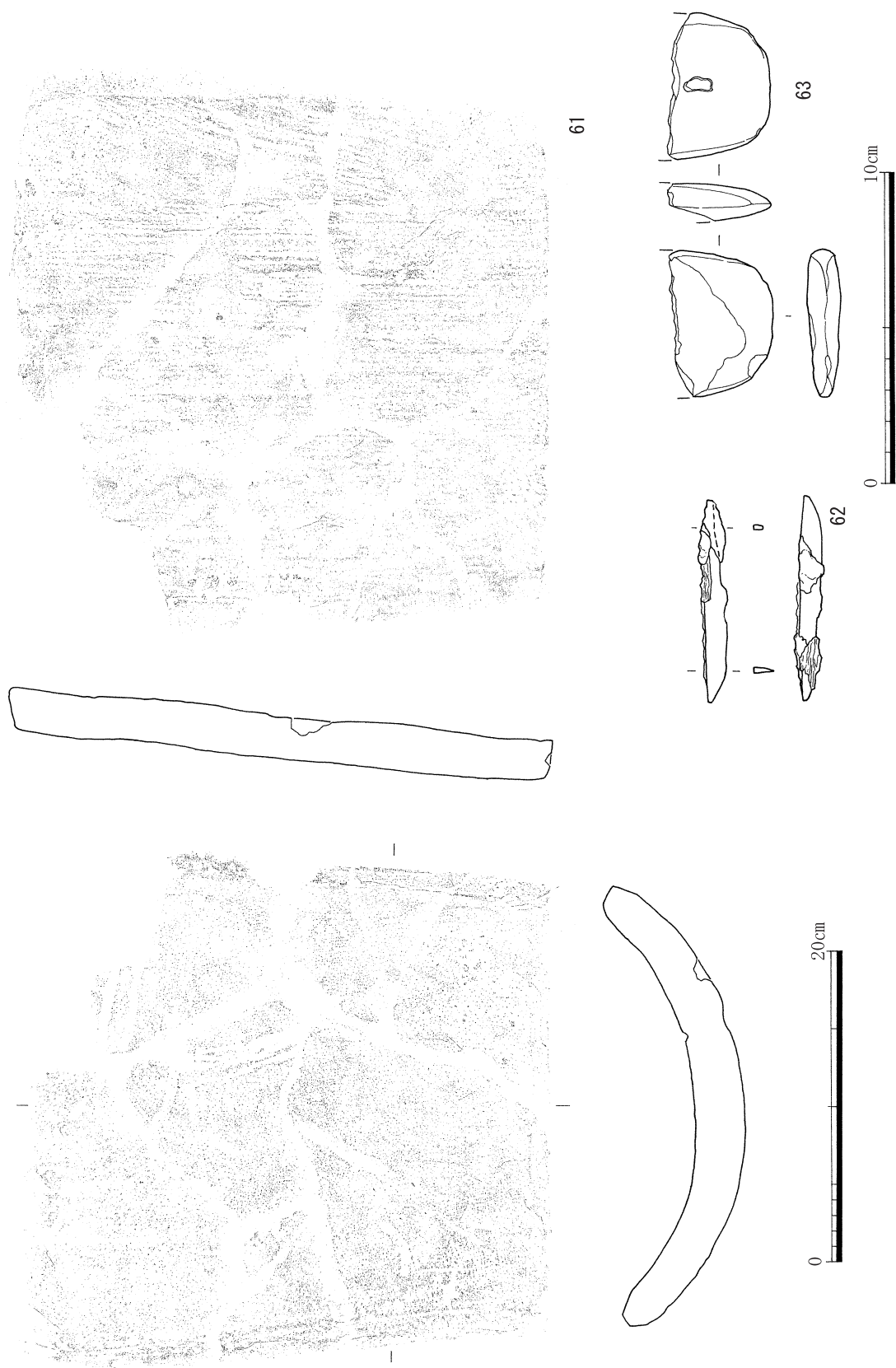


Fig. 32 平瓦(2)・鉄刀子・磨製石斧

# Ise Kokubun-ji Temple Site Preliminary Report II

## Table of Contents

Introductory remarks		5 Trial trenching of the pagoda	12
Chapter1 Introduction	1	6 South gate	12
Chapter2 Structural features and artifacts		7 Artifacts	15
1 Standard layers	3	Chapter3 Conclusion	16
2 Main gate	3	English table of contents and summary	29
3 Southeastern corner of cloister	6	Abstract	41
4 Northeastern corner of cloister	10		

## Summary

Kokubun-ji Temple(国分寺) was built in each Province by Emperor Shomu(聖武天皇)'s imperial edict in the middle of 8th century. The temple consists of a monastery and nunnery. Ise(伊勢) Kokubun-ji Temple site is on a parcel of land which is located at the left bank of Suzuka(鈴鹿) River in Kokubu-town(国分町), Suzuka-city. Although the temple was designated as the National Historic Site in 1922, no sufficient protection measures were taken and it was left as farmland for long time.

Suzuka-city Board of Education carried out identification research to protect the remains from 1988 to 1990. They identified the temple compound area(伽藍地) which is surrounded by the tamped-earth walls with roofs(築地), each of which measures approximately 180 meters long. After the results of the research were documented, almost all of land of the remains had been switched to public-owned land from 1995 to 1997.

Research to find the locations of buildings were carried out in 1999. This was to make plans to improve the site as a park of historical site. The 22nd to 24th researches were already carried out and the location and size of the lecture hall(講堂) and the golden hall(金堂) were identified.

On this 25th research, the Board of Education tried to identify the locations of the main gate(中門) and the south gate(南門) and to find the site of the pagoda(塔), which had not been identified yet.

The main gate was the entrance to the center part of the temple which was surrounded by cloister(回廊) and the sacred precincts of the Buddha. It was confirmed that the main gate was located 31 meters south of the golden hall. Although it seems that the main gate was constructed on base stones with tile roofing, the foundation platform was scraped out and only a small part of the foundation platform still remains. The location and size of the foundation platform was somehow identified with only traces of land improvement, which spreads 19 meters from east to west and 12 meters from south to north under the ground. To the south of the main gate, there is a large earthen pit in which tiles were buried. The potsherds which came out of the earthen pit were produced in early 9th century and it seems that large-scale repaired work was carried out around that time.

To the eastwest of the foundation platform of the main gate, there are two ditches which run parallel to each other with a distance of approximately seven meters. Although it seems that the space between the two ditches was the base of the cloister, such things as postholes and traces of a base stone removal can not be identified because the remains are not preserved like the main gate.

The size of the cloister was estimated by expanding the test trench of the east cloister. As a result, the size of the cloister was identified as approximately 34 meters from the center of the main gate to the east and 51 meters from the south to north. It was also identified that the cloister was connected between the main gate and the golden hall.

The south gate was one of the important entrances of the temple. The location of the south gate was identified 26 meters south of the main gate. The foundation platform of the south gate was almost perfectly scraped out and only the ditches that surrounded the south gate currently remain. Estimated size of the south gate is approximately 18 meters from west to east and 11 meters from south to north.

The land to the south gate has eight corner which looks like a rectangle with all the four corners are cut out. There are no similar examples that exist. The research on the details of the south gate is planned to be carried out continuously in next year.

Regrading the pagoda, the test for digging was carried out. However, no structural remains of a pagoda was found.





伊勢国分寺跡第25次調査区全景(南から)



伊勢国分寺跡第25次調査区全景(垂直)



中門および東・西回廊(垂直)



中門および西回廊(南から)



中門および西回廊(西から)



西回廊(南から)



中門基礎地形セクション(南から)

Plate 3



西回廊外溝(北から)



西回廊外溝セクション(南から)



西回廊内溝(南から)



西回廊内溝セクション(北から)



中門前面瓦溜土坑(南から)



中門前面瓦溜土坑セクション(北から)



現地説明会



中門及び東回廊(南から)



中門及び東回廊(東から)



中門基礎地形G区セクション(北から)



重圏文軒丸瓦の出土



中門基礎地形南東コーナー(東から)



中門拡張区(南から)

Plate 5



東回廊南東隅(南から)



東回廊東外溝(南から)



東回廊南東隅(西から)



東回廊南東隅内溝(東から)



東回廊南外溝(西から)



東回廊南外溝J区セクション(東から)



竪穴状土坑SI0125検出(西から)



竪穴状土坑SI0125掘り上がり(西から)



竪穴住居SI0127検出(南から)



竪穴住居SI0127瓦出土(南から)



竪穴住居SI0127掘り上がり(西から)



塔推定地トレンチ拡張部(西から)



塔推定地トレンチ全景(西から)



東回廊北東隅(南から)



東回廊北東隅東トレンチ(西から)



東回廊北東隅外溝(北から)



東回廊北東隅東拡張区外溝(西から)



東回廊北東隅北拡張区外周溝



東回廊北東隅北拡張区外溝セクション(北から)



東回廊北東隅内溝(南から)



東回廊北東隅内溝セクション(北から)



南門外周溝(西から)



南門南西隅(東から)



南門北東隅(南から)



南門北西隅(西から)



Plate 9



11



14



12



15



13



16



3



2



17



9



10

軒丸瓦

(番号は実測図番号)



18



20



22



28



30



29



35



38



41



42



49



51



50



52



53

軒平瓦

(番号は実測図番号)

Platell



54



61



21



23



19



55



56



57



58



59



60



62



63

平瓦・埴・押印瓦・須恵器・灰釉陶器・土師器・鉄刀子・磨製石斧 (番号は実測図番号)

# 報告書抄録

ふりがな	いせこくぶんじあと2							
書名	伊勢国分寺跡2							
編著者名	ふじわらひでき はやし かずのり 藤原秀樹 林 和範							
編集機関	鈴鹿市教育委員会 鈴鹿市考古博物館							
所在地	〒513-0013 <small>すずか しこく ぶちょう</small> 三重県鈴鹿市国分町224番地 TEL0593(74)1994							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いせこくぶんじ 伊勢国分寺 あと跡	みえけんすずかし 三重県鈴鹿市 こくぶちょうあざどうあと 国分町字堂跡 283・284・285・ 286・290・291・ 292 あざにしたかぎ 字西高木229・ 230	24207	361	34° 54' 27"	136° 34' 00"	2001.5.14 ～ 2001.10.31  2002.2.7 ～ 2002.3.12	1,100m <sup>2</sup>	学術調査
	寺院	奈良・平安	建物基壇、溝掘立柱建物、 竪穴住居、土坑	土師器・須恵器 丸瓦・平瓦・ 軒丸瓦・軒平瓦 塼、灰釉陶器 鉄刀子、磨製石斧	伊勢国分寺跡の中門・回廊 南門基壇の位置と規模を確認。			

## 伊勢国分寺跡2

発行日 2002年3月31日  
 編集・発行 鈴鹿市教育委員会  
 鈴鹿市考古博物館  
 〒513-0013  
 三重県鈴鹿市国分町224番地  
 TEL0593(74)1994  
 FAX0593(74)0986  
 e-mail: kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp  
 URL: http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/  
 印刷 中村特殊印刷株式会社

# Ise Kokubun-ji Temple Site

## Preliminary Report II

March, 2002

Suzuka City Board of Education  
Mie Pref., Japan